

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第36集

さかい がわ い せき  
境 川 遺 跡

1991

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

## 序

境川は、その名のとおり古くから三河と遠江の国境を流れる小川であります。付近には今なお江戸時代の宿場町の面影をとどめる白須賀宿や、東海道有数の景勝地である潮見坂があり、多くの旅人が行き来した往時の様子がしのべられます。近代には、この東海道を踏襲して国道一号線が付設され、高速道路が走る現代でもこの幹線の重要性は衰えるどころか、経済大国日本の大動脈として、その交通量は増える一方であります。そのため、昭和48年にはこの地に国道一号線のバイパスを建設することが計画されました。

この豊橋東部から浜名湖の西部一帯には、古墳時代から鎌倉時代にかけての一大窯業生産地である湖西古窯跡群の存在が全国的に知られております。そして今回の発掘調査の結果、この境川遺跡も湖西窯跡群に含まれる飛鳥～奈良時代の窯跡の一つであることがわかりました。また、窯跡と共にその作業場と思われる住居跡や、須恵器作りに用いたとみられる巨大な粘土のかたまりなど、調査前には予想もつかなかった様々な新しい発見がありました。これらの成果についての報告をいたします本書が、研究者をはじめとする多くの方々に利用され、ひいては埋蔵文化財の保護思想の普及につながることを願ってやみません。

最後になりましたが、この境川遺跡の現地調査および報告書作成に御協力いただいた、関係者ならびに地元の方々に厚く御礼を申し上げる次第であります。

平成3年3月

財団法人愛知県埋蔵文化財センター理事長

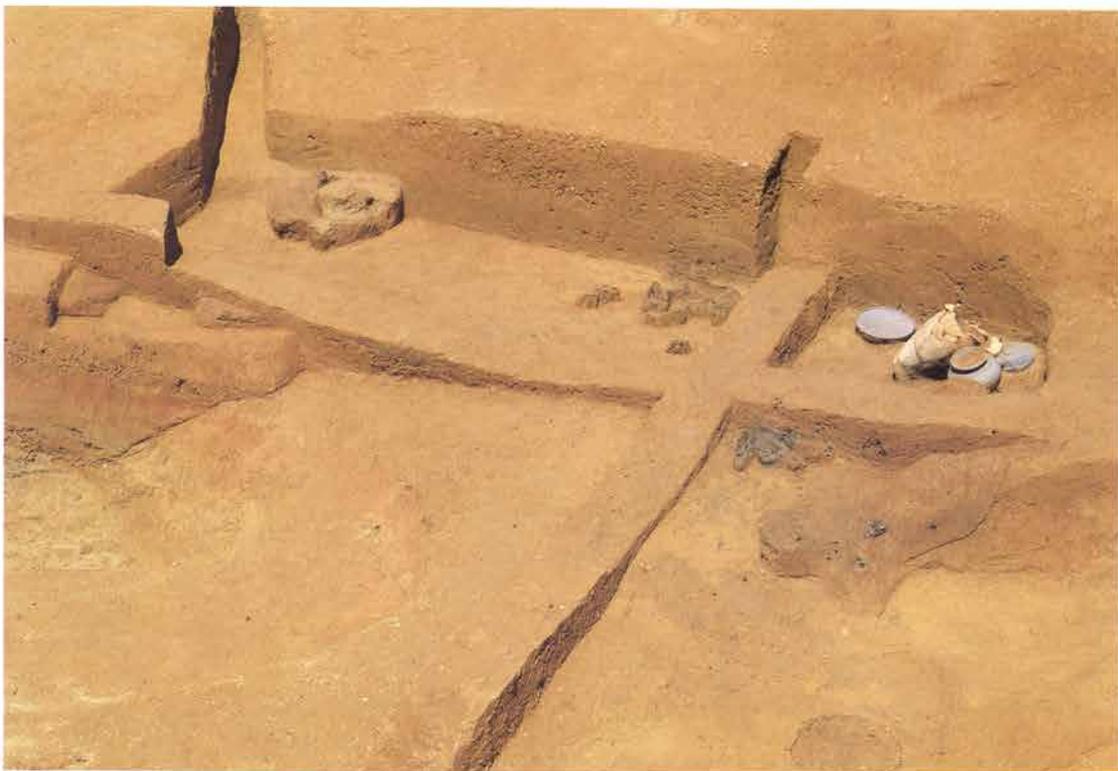
松川 誠次

## 例 言

1. 本書は、愛知県豊橋市東細谷町境川地内に所在する境川遺跡（『愛知県遺跡分布地図（Ⅲ）東三河編』による遺跡番号79716）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、国道1号線潮見バイパス建設に伴う事前調査として、愛知県教育委員会を通じ、建設省中部地方建設局からの委託を受けて、財団法人愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は、平成2（1990）年5月から7月までである。
4. 調査に際しては、次の各機関の御指導・御協力を得た。  
愛知県教育委員会文化財課・愛知県埋蔵文化財調査センター・建設省中部地方建設局浜松工事事務所・豊橋市教育委員会・豊橋市美術博物館・湖西市教育委員会
5. 発掘調査は、山田基・樋上昇が担当し、大橋正明・北村和宏・松田訓・安井俊則の助力を得た。また、山本ひろみ・飯田秀雄・岡部元次・佐藤静雄・鈴木佐吉・藤田芳春・森岡正男の各氏には現地調査の御協力を願った。
6. 遺物の整理、製図などについては、次の方々の御協力を得た。  
長谷川恵子・酒井三芳・多田富代・玉作美智子・中島たづ子・白頭久代・服部智子・蒔田すま子・山口妙子（敬称略）
7. 本書の執筆は、第1章（1）を山田、他は樋上が担当し、編集は樋上が行った。
8. 現地調査ならびに報告書作成については、次の方々に御教示・御協力を賜った。  
岩瀬彰利・後藤健一・檜崎彰一・贅元洋（50音順、敬称略）
9. 調査区の座標は、建設省告示の平面直角座標第Ⅶ系に準拠した。
10. 出土遺物および調査記録などの資料は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。



1. SB01全景



2. SB02全景

# 目 次

## 第1章 序章

- (1) 調査にいたる経過と調査の経緯…………… (山田 基) 1
- (2) 位置と環境…………… (樋上 昇) 2
- (3) 調査区の設定と調査の方法…………… 4

## 第2章 遺構

- (1) 基本層序と調査区の地形…………… 6
- (2) SY01灰原 …………… 6
- (3) SD01 …………… 8
- (4) SD02 …………… 8
- (5) SK01 …………… 8
- (6) SB01 ……………14
- (7) SB02 ……………15

## 第3章 遺物

- (1) 器種分類について……………18
- (2) SB01 ……………20
- (3) SB02 ……………23
- (4) SK01・SD02……………24
- (5) SY01灰原・SD01……………26
- (6) 包含層……………29
- (7) 小結……………30

## 第4章 まとめ……………32

## 出土遺物観察表……………34

## 巻頭図版

巻頭図版 1 SB01全景

巻頭図版 2 SB02全景

## 図版目次

図版 1 遺跡遠景・調査区全景

図版 2 SY01灰原検出状況・  
SY01灰原灰層検出状  
況・SY01灰原灰層除去  
状況

図版 3 SD01・SD02土層断面・  
SD01・SD02土層断面  
(西拡張区)・SY01灰  
原灰層堆積状況

図版 4 SY01灰原灰層堆積状  
況・SK01掘削状況・  
SK01土層堆積状況

図版 5 SB01全景・SB01全景  
・SB01土器出土状況

図版 6 SB01カマド断ち割り  
状況・SB01カマド断  
面・SB01カマド完掘状  
況

図版 7 SB02全景・SB02全景・  
SB02粘土塊・SB02カ  
マド断面・SB02土器出  
土状況

図版 8 SB01出土遺物

図版 9 SB02・SK01・SD02出  
土遺物

図版 10 SY01灰原・SD01出土  
遺物・調整痕・ヘラ記  
号

## 挿図目次

第 1 図 調査前状況…………… 1

第 2 図 境川遺跡位置図…………… 2

第 3 図 境川遺跡と周辺の遺跡 (1 : 50,000)…………… 3

第 4 図 調査区と周辺の地形 (1 : 2,000)…………… 4

第 5 図 調査前地形測量図 (1 : 200)…………… 5

第 6 図 調査区遺構図 (1 : 200)…………… 7

第 7 図 SD01・02・SK01平面図 (1 : 50)…………… 8

第 8 図 SY01灰原灰層検出時地形測量図 (上)・  
SY01灰原灰層除去後地形測量図 (下) (1 : 100) …… 9

第 9 図 SD01・02・SK01土層断面図 (1 : 40)…………… 10

第 10 図 SD01・02・SY01灰原土層断面図 (1 : 40)…………… 11

第 11 図 SY01灰原土層断面模式図 …… 12

第 12 図 SB01平面図 (1 : 20) …… 13

第 13 図 SB01カマド断面・立面図 (1 : 20)…………… 15

第 14 図 SB02平面図 (1 : 20)…………… 16

第 15 図 SB02粘土塊出土状態図 (1 : 10)…………… 17

第 16 図 境川遺跡出土土器器種分類表 (1 : 8)…………… 19

第 17 図 SB01出土土器 1 (1 : 4)…………… 21

第 18 図 SB01出土土器 2 (1 : 4)…………… 22

第 19 図 SB02出土土器 (1 : 4)…………… 24

第 20 図 SK01・SD02出土土器 (1 : 4)…………… 25

第 21 図 SY01灰原出土土器 1 (1 : 4)…………… 27

第 22 図 SY01灰原出土土器 2  
SD01・包含層出土土器 (1 : 4)…………… 29

第 23 図 境川遺跡遺構変遷表…………… 30

# 第1章 序章

## (1) 調査にいたる経緯と調査の経過 (第1図)

境川遺跡は、愛知県と静岡県との県境に位置している。国道1号線の交通量緩和のため、1973年、建設省中部地方建設局浜松工事事務所により、この地域に国道1号線潮見バイパスの建設が計画された。

愛知県遺跡分布地図に示されているように、この潮見バイパス建設予定地付近は湖西古窯跡群に含まれており、古代から中世にかけての窯跡が多数存在している。そのため、愛知県教育委員会文化財課と豊橋市教育委員会は、道路予定地内を中心に、遺跡の存在を確認するための分布調査を行った。その結果、今回調査の対象となった地域で古墳状隆起部分1ヶ所を確認し、奈良時代と思われる須恵器片を数点採取したため、事前に発掘調査が必要がある判断し、調査を実施することとした。

発掘調査は、建設省中部地方建設局浜松工事事務所より、愛知県教育委員会を通じて財団法人愛知県埋蔵文化財センターが委託を受け、これを担当した。調査は1990年4月中旬より樹木の伐採や、バックホーによる抜根・表土はぎを行い、5月8日に地形測量、9日から発掘作業を開始した。調査期間はほぼ2ヶ月を要し、7月5日には発掘作業が終了し、9日で埋め戻しが完了した。調査面積は600である。調査終了後、遺跡の周辺に12ヶ所(のべ12㎡)トレンチを入れ、遺跡のひろがりを確認したが、遺構・遺物等は検出できなかった。

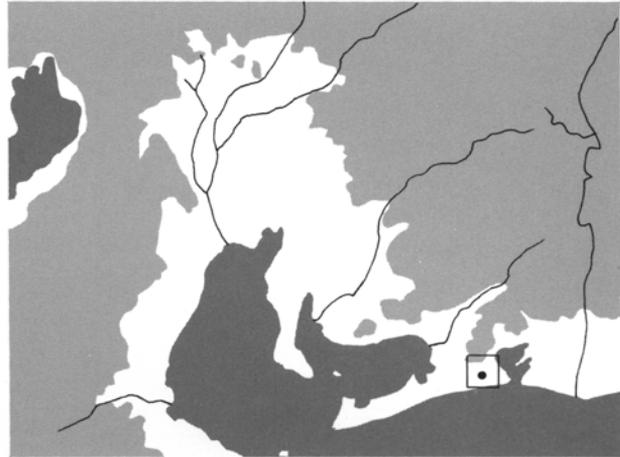
出土遺物の整理は調査終了後、8月まで豊川事務所で行い、引き続き8月以降は愛知県埋蔵文化財調査センターで調査報告書作成までの作業を行った。



第1図 調査前状況

## (2) 位置と環境 (第2・3図)

国道1号線を豊橋市街から東に向かって車で25分くらい走り、一里山の交差点を過ぎると、ほどなく愛知県豊橋市と静岡県湖西市との間を南から北に流れて梅田川に注いでいる、境川に達する。遺跡は、今では幅5mほどの小川であるこの境川に面する西側斜面に位置しており、行政的には愛知県豊橋市東細谷町境川に属する。地形的には天伯原台地と呼ばれる、第四紀洪積世の高位段丘礫質堆積物を基盤とするいわゆる洪積台地が、境川の侵食をうけることによってできた河岸段丘の西側段丘崖にあたり<sup>1)</sup>、標高調査区の最高所で63.41mをはかる。



第2図 境川遺跡位置図

現在の国道1号線は、この付近では江戸時代の旧東海道をほぼ踏襲しており、一里山交差点のすぐ北西には文字通り一里塚が現在もなお残っている。また、静岡県内に入るとまもなく当時の宿場町である境宿、宝永4(1707)年の大津波ののち、海岸線より台地上に移転した白須賀宿がある<sup>2)</sup>。白須賀宿を過ぎて、東海道有数の景勝地、潮見坂を下ると、大津波以前の旧白須賀宿とされる元町を経て新居関所に達する。元町から新居にかけての海岸線では、本報告書と関連する国道1号線の潮見・浜名バイパス建設にともなう発掘調査が行われ、17世紀代を中心とする時期の村落跡などが見つまっている<sup>3)</sup>。

さかのぼって古墳時代後期から鎌倉時代には、湖西市を中心に東は新居町から西は豊橋市東部に及ぶ、浜名湖の西部一帯の丘陵では、湖西古窯跡群と呼ばれる須恵器から灰釉系陶器にかけての窯跡が広く分布し<sup>4)</sup>、一里山付近の台地上には中世中頃の遺物散布地が点在している。また、梅田川の北側の丘陵には上の山・西荒神・四ッ塚の各古墳群が築かれる。さらに北方の鍋山には古代の寺院跡である普門寺元堂跡や中世の船形山城跡があり、その北西の手洗には横穴式石室を埋葬施設とする日吉神社古墳がある。境川遺跡の付近での、弥生時代以前の遺跡は豊橋市域ではほとんど知られていない。湖西市側では白須賀集落の北方山中で享和元(1801)年に近畿式銅鐸が2点出土しており、うち1点は現在豊橋市の東観音寺に保管されている<sup>5)</sup>。

註) 1. 木宮一邦「湖西南部の地質と古窯出土陶器の原土」『東笠子遺跡群発掘調査概報 昭和57年度』静岡県湖西市教育委員会 1983

2. 後藤健一「第1章 遺跡の環境」『長谷元屋敷遺跡 昭和61年度』国道1号線潮見バイパス(湖西地区)埋蔵文化財発掘調査報告書 建設省中部地方建設局・静岡県教育委員会・湖西市教育委員会 1987

3. 註2に同じ

4. 註1ほか

5. 小林久彦「二川宿本陣発見の白須賀銅鐸之図」『三河考古』第2号 1989



- |                      |                     |
|----------------------|---------------------|
| 1. 境川遺跡              | 11. 上の山古墳群 (14基)    |
| 2. 牛田遺跡 (中世、遺跡散布地)   | 12. 立岩古墳群 (2基)      |
| 3. 松ヶ谷遺跡 (近世、遺物散布地)  | 13. 東荒神古墳           |
| 4. 一里塚               | 14. 四ツ塚古墳群 (8基)     |
| 5. 一里山古墳             | 15. 中原神明社古墳         |
| 6. 比舎古古墳             | 16. 西荒神古墳群 (7基)     |
| 7. 茶屋の下遺跡 (遺物散布地)    | 17. 普門寺元堂跡 (古代、寺院跡) |
| 8. 豊清古墳              | 18. 船形山城 (中世、城館跡)   |
| 9. 丸山古墳              | 19. 日吉神社古墳          |
| 10. 上の山遺跡 (縄紋、遺物散布地) | 20. なべ山古墳           |
|                      | 21. 白須賀銅鐸出土地        |

※番号のないドットは窯跡の位置を示す

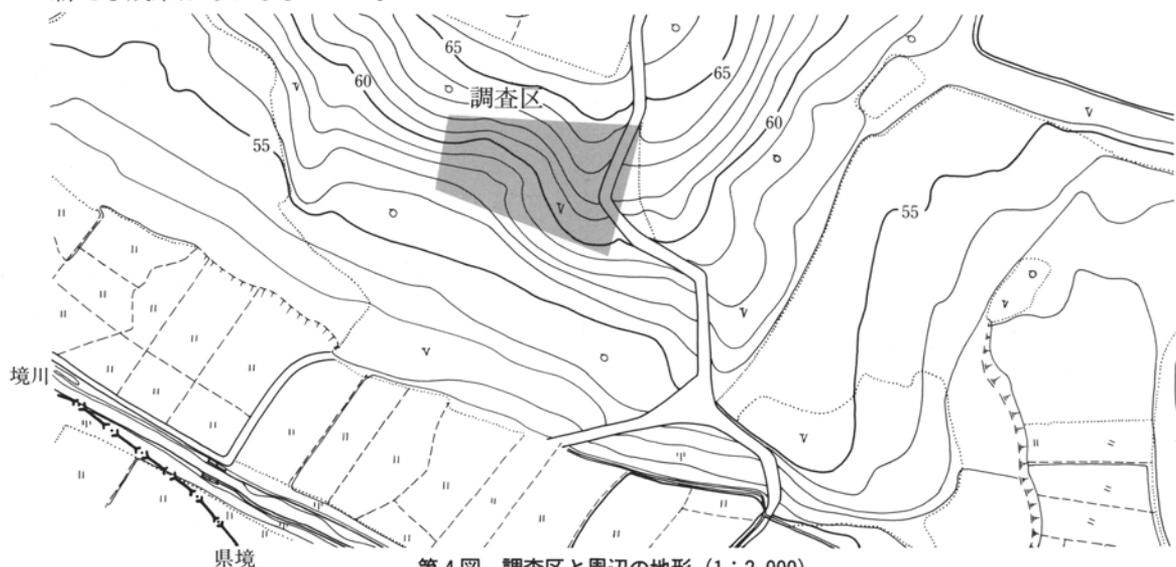
第3図 境川遺跡と周辺の遺跡 (1:50,000)

### (3) 調査区の設定と調査の方法 (第4・5、図版1)

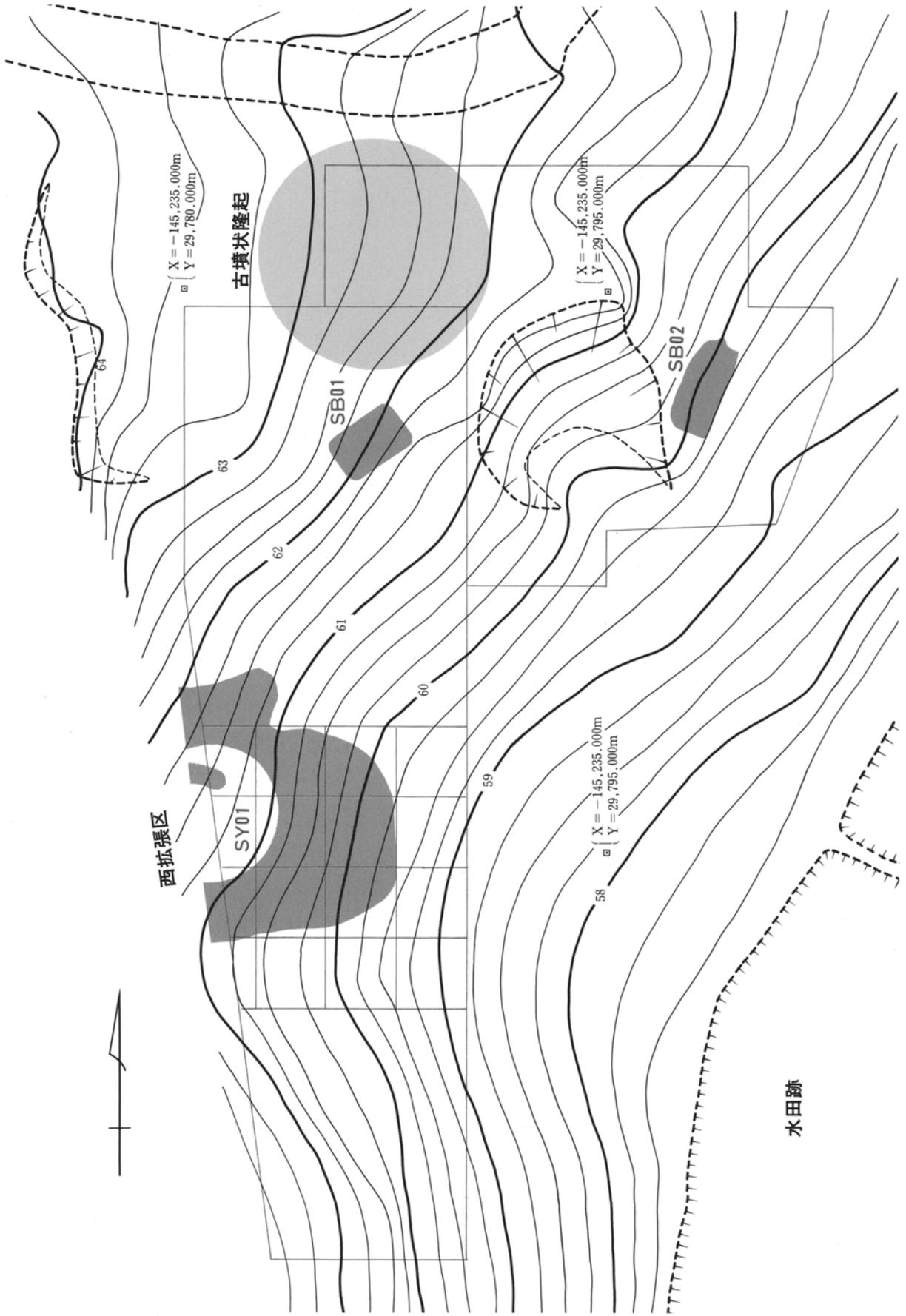
国道1号線の浜名バイパスは、浜名湖にかかる浜名大橋から海岸線に沿って東西に走り、現在は白須賀の新町付近で国道1号線に合流している。潮見バイパスはこの浜名バイパスに接続してさらに東にのび、潮見坂の西方、西長谷のあたりで屈曲して境川の西岸を流れに沿うかたちで北上し、一里山のやや東側で国道1号線につながる予定となっている。この潮見バイパスの路線が通る境川の西側段丘崖にはいくつかの窯跡が点在している。愛知県遺跡分布地図の東三河編によると、それら窯跡に混じって「境川古墳」(遺跡番号79716)の記載があり、以前この浜辺で須恵器片が採取されてはいるが、墳丘の規模や墳形・埋葬施設などは不明であった。今回、この「境川古墳」がバイパスの予定地内に入ることから、1990年5月8日から7月9日のほぼ2ヵ月間にわたって発掘調査を行うこととなった。

調査範囲は「境川古墳」がのる尾根の張り出し部分とさらにその南側の尾根までとし、南北は約50m、東西は道路幅の約半分にあたる25mの範囲で、樹木を伐採して平板測量を行った。その結果、「古墳」想定位置ではすぐに地山が露出したため、古墳存在の可能性は否定された。一方、2つの尾根にはさまれた谷部で須恵器片を数点採取しえたことから、この付近になんらかの遺構が存在する可能性が高まった。そこで、樹木伐採範囲の西側部分で東西10m、南北35mを発掘区とし、東側を廃土置き場とした。発掘区は5mグリッドごとに北から南へと拡張していき、グリッドの境には適宜、土層観察用のベルトを残した。表土は原則として重機で除去したが、一部表土の堆積が薄いところでは人力で掘削した。

調査の結果、発掘区北半の尾根の南斜面で7世紀末～8世紀前半の竪穴住居跡が1軒見つか( SB01)、中央の谷部では7世紀後半から8世紀前半にかけての窯跡の灰原を検出したが( SY01灰原)、この窯の窯体部分は道路予定地外であったため、発掘区を境界杭の際まで拡張し(西拡張区)、焚口前面からのびる排水溝( SD01・02)とSD02につながる土坑( SK01)を検出した。灰原部分の調査については、灰層の堆積状況詳しく調べるために5mグリッドをさらに4分割して2.5mグリッドを設定し、各グリッドごとに土層観察用のベルトを残した。その後、調査の最終段階で、SB01の東側での遺構の有無を確認するために発掘区をさらに東西12m、南北15mの範囲で東に拡張した。結果、重機による攪乱をうけてはいたが、竪穴住居跡をもう1軒検出することができた( SB02)。時期は8世紀半葉～後半に属する。発掘調査終了後、道路予定地内での未知の窯跡を発見すべく、分布調査を行ったが新たな成果はあがらなかった。



第4図 調査区と周辺の地形 (1:2,000)



第5図 調査前地形測量図 (1:200)

## 第2章 遺構

### (1) 基本層序と調査区の地形（第6図、図版1）

調査区における基本層序は、薄い腐植土の下にⅠ：暗赤褐色砂質土（砂礫をほとんど含まず、キメが細かい）が約15cmの厚さで堆積し、以下Ⅱ：黄褐色砂質土（砂礫を含む）が約20cm、Ⅲ：褐色砂質土が約15cm、Ⅵ：地山（赤褐色砂質土）の順となる。Ⅰ・Ⅱ層は遺物包含層で、遺構はおおむねⅢ層から掘削している。

地形的には西に高く、東に低い斜面で、調査区の北西隅と南西隅が尾根筋あたり、調査区の中央や南寄りでは谷状地形をなす。標高は調査区の最高所で63.41m、最も低いところでは58.81m、をはかる（いずれも地山面）。

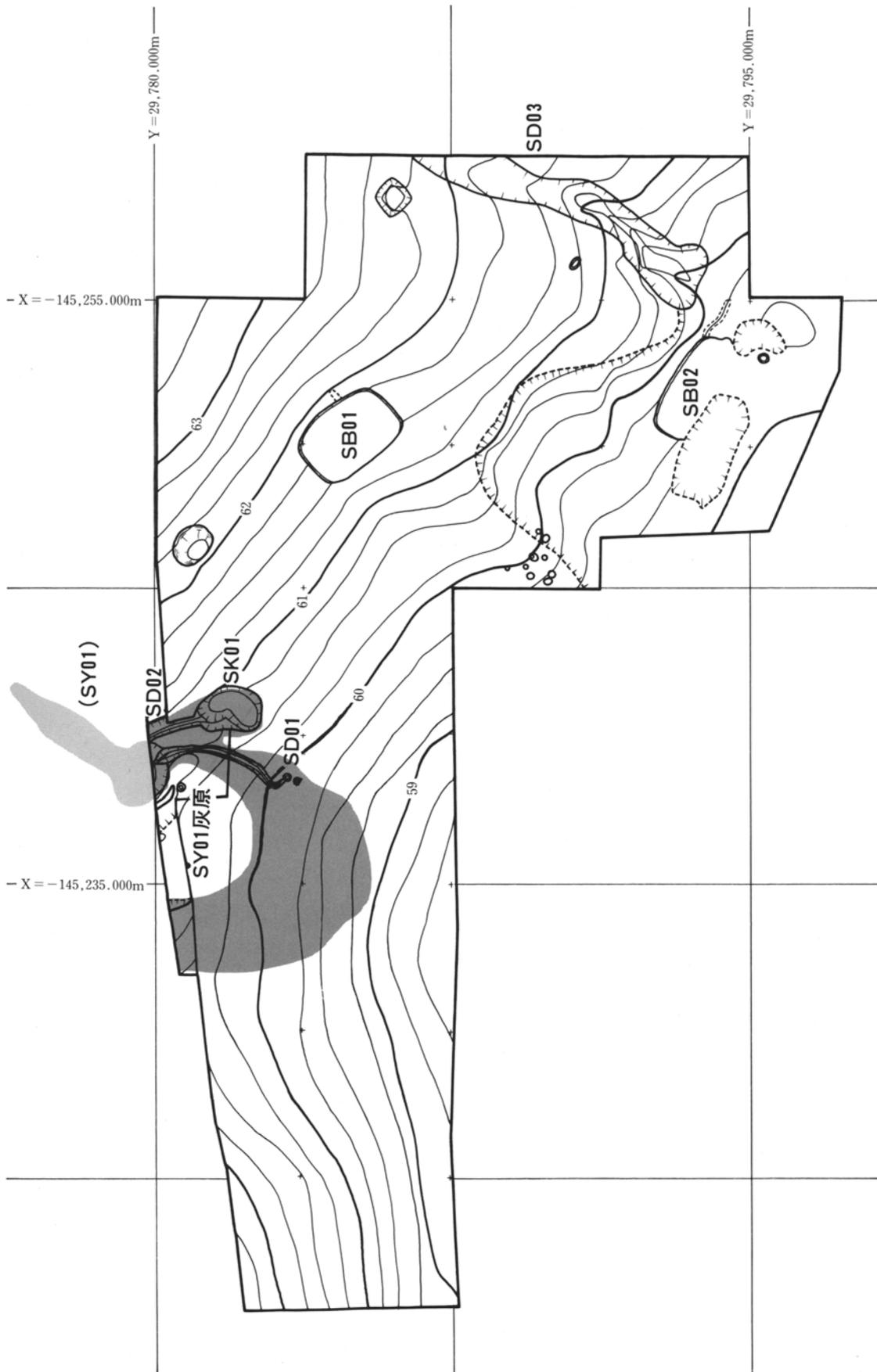
遺構は調査区の北半に集中している。須恵器の窯跡に関連する遺構としてはSY01灰原・SD01・02・SK01があり、竪穴住居跡はSB01・02の2軒、他にピットが数基と調査区の北端を流れる時期不明の溝（SD03）がある。

### (2) SY01灰原（第8～11図、図版2～4）

調査区の中央やや南寄り、谷状地形の北側斜面に灰原がひろがり、西側の調査区外に西北西から東南東に向けた窯体が築かれる。その排土を窯の正面南側に掻き出し、マウンド状に積み上げて前庭部がつくられている（Ⅳ～Ⅷ層）。窯の焚口には土坑があり、前庭部の北側に沿って排水溝がのびている（SD01・02）。炭化物・焼土・窯壁・遺物などで形成される灰層（Ⅴ-1～7層）は前庭部の斜面に幅約2～4mにわたってほぼ同心円状にわたって堆積している。最も厚く堆積しているところで25cm程度と灰層はきわめて薄く、第3章で後述するように遺物の出土量も非常に少ない。堆積の状況は数層にわたっているが、遺物の時代相との対応関係は明確にし難い。ただ、灰原出土の遺物の年代幅が1世紀近くにおよんでいることや、後述するように排水溝を掘削し直していることなどから、2基以上の窯体があり、それぞれの窯体の灰原が重複している可能性が高い。また、前庭部ではピットをいくつか検出しているが、現状では建物としてまとまらない。しかし、焚口部に小屋がけのような施設があったことは考えられる。

ここで、第8図と第11図について説明を加えておく。第8図はSY01灰原部分のみの地形測量図である。上段は灰層を検出した状況図であり、下段は灰層を除去した段階での測量図である。上段では、灰層が同心円状にひろがっており、北側のSK01が接続する部分の西に焚口があり、そこから南東方向に灰が掻き出されていった様子が読み取れる。下段では、窯体掘削の際の廃土によって前庭部のマウンドが形成され、焚口からのびる排水溝がマウンドの北側に沿ってゆるやかに彎曲している状況がよくわかる。等高線は、第6図の地山面での測量図と比較すると、当初は谷状の地形であったところにマウンドを築き、さらにその斜面に灰が堆積していった状況があらわれている。

第11図は灰層の堆積状況を三次元的に復元した模式図である。横軸に対して縦軸を2倍にしているために、傾斜は実際の遺構より急になっているが、この図によって、灰層の堆積状況がより具体的に理解できるものと考えている。



第6図 調査区遺構図 (1 : 200)

(3) SD01 (第7～11図、図版3)

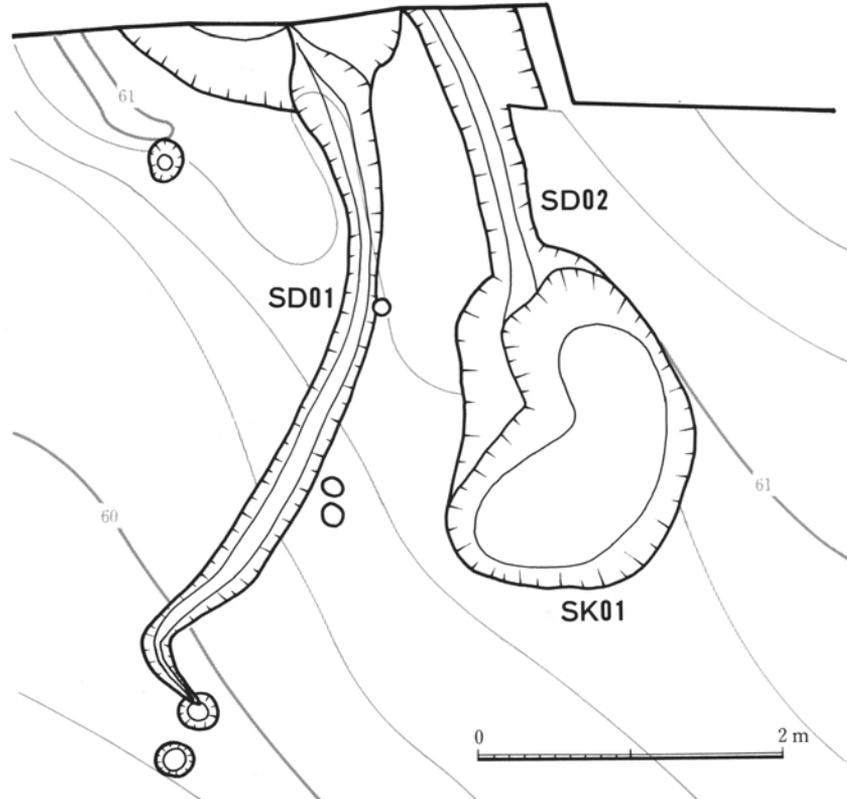
SD01は前述のように、窯の焚口から前庭部に沿ってゆるやかに円弧を描きながら南東に流れ、先端が北東方向に屈曲して終わる排水用の溝である。調査区西拡張区では窯の焚口付近で急激に幅がひろがり、深さも皿状の床面を形成しつつ深くなっていき、焚口前面の土坑につながる。焚口以外でのSD01の断面形状は深さ20cm程度の「U」字形である。埋土は炭化物・焼土・窯壁・遺物からなっており、SY01灰原のV層と一連のものである。西壁断面及び西拡張区断面からも明らかなように、SD01はSD02によって切られている。埋土の堆積状況は、西壁断面では上からV-7層（暗灰褐色砂質土、炭化物・焼土混じり）、V-1層（黒灰色砂質土、炭化物・焼土混じり）、V-2層（淡黒灰色砂質土、炭化物・焼土混じり）の3層で、西拡張区断面ではほぼV-1層の単一層となっている。

(4) SD02 (第7～11図、図版3)

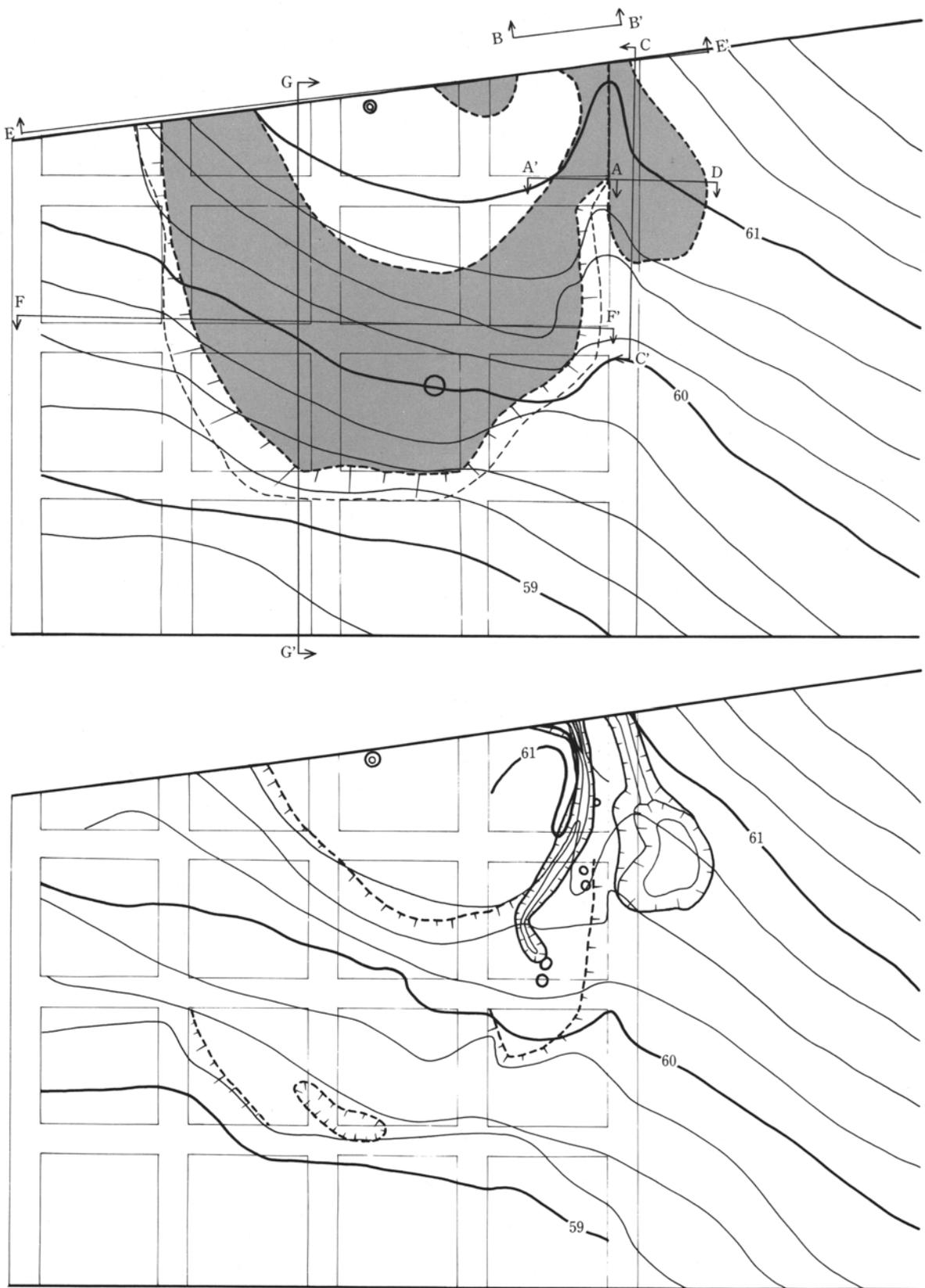
SD02はSD01の北側にSD01を切って掘削されており、東端はSK01につながる。断面の形状は南側がゆるやかで、北側に向かって急な斜面をとる「V」字形をなしている。埋土はⅢ・Ⅳ・Ⅴ層が入り混じって互層をなす。SY01灰原の項でも述べたように、このSD02と次に記すSK01はSD01につながる窯とは別の窯にかかわる遺構である可能性が高い。

(5) SK01 (第7～9図、図版4)

SK01はSD02につながり、長軸を東西方向にとる楕円形の土坑である。南壁は前庭部に沿って中ほどでいったん狭まり、下端で見ると、片側のみがくびれた瓢箪形である。断面は短軸方向では南側がゆるやかで北側の壁がやや直立する船底形で、長軸方向は中央が高く、その両側が深くなる形状である。埋土は黒灰色から淡赤褐色の砂質土で、炭化物・焼土を大量に含んで縞状に堆積している。SD02と一連の遺構で、窯の排水と塵介の処理を目的として掘削したものであろう。

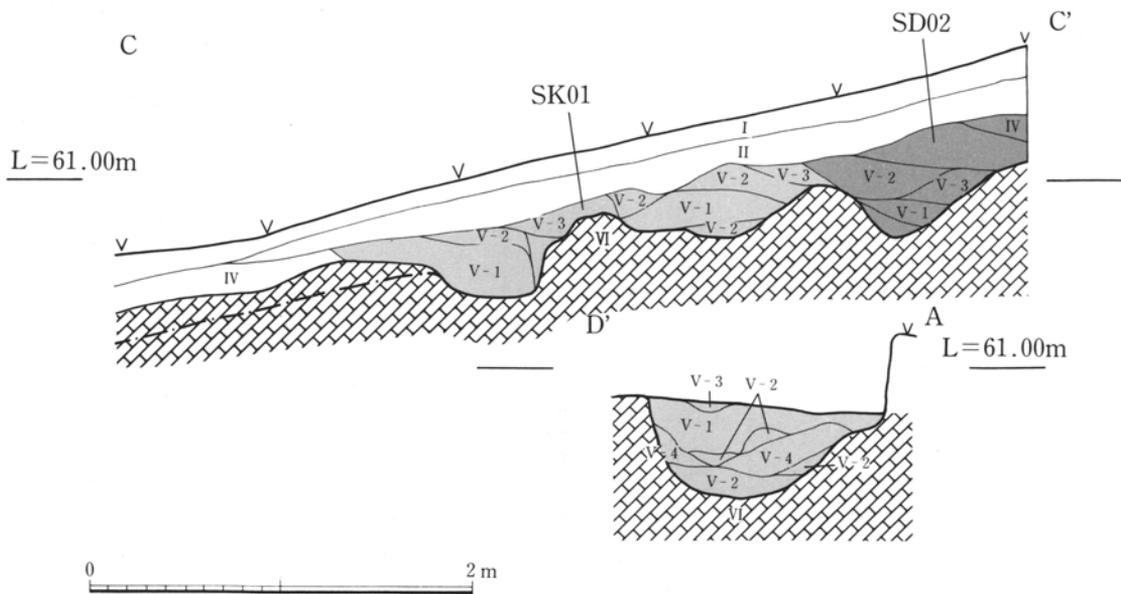
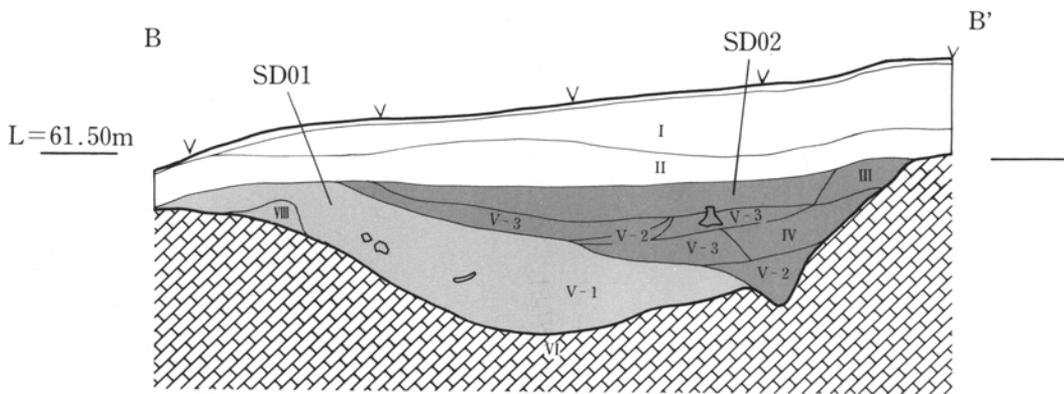
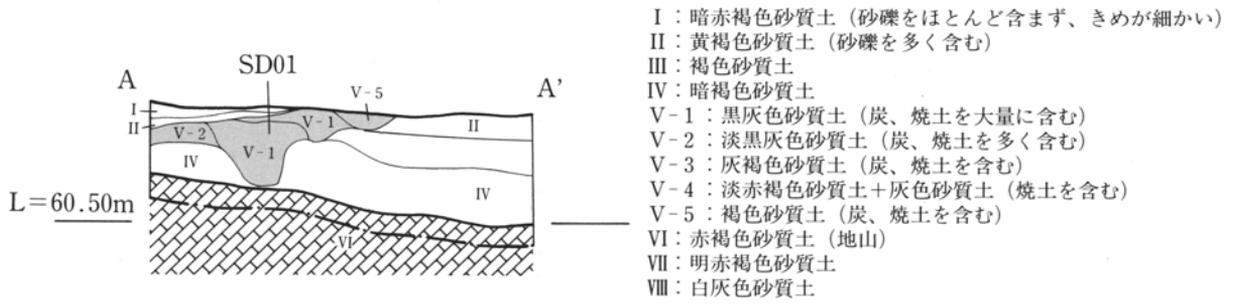


第7図 SD01・02・SK01平面図 (1:50)

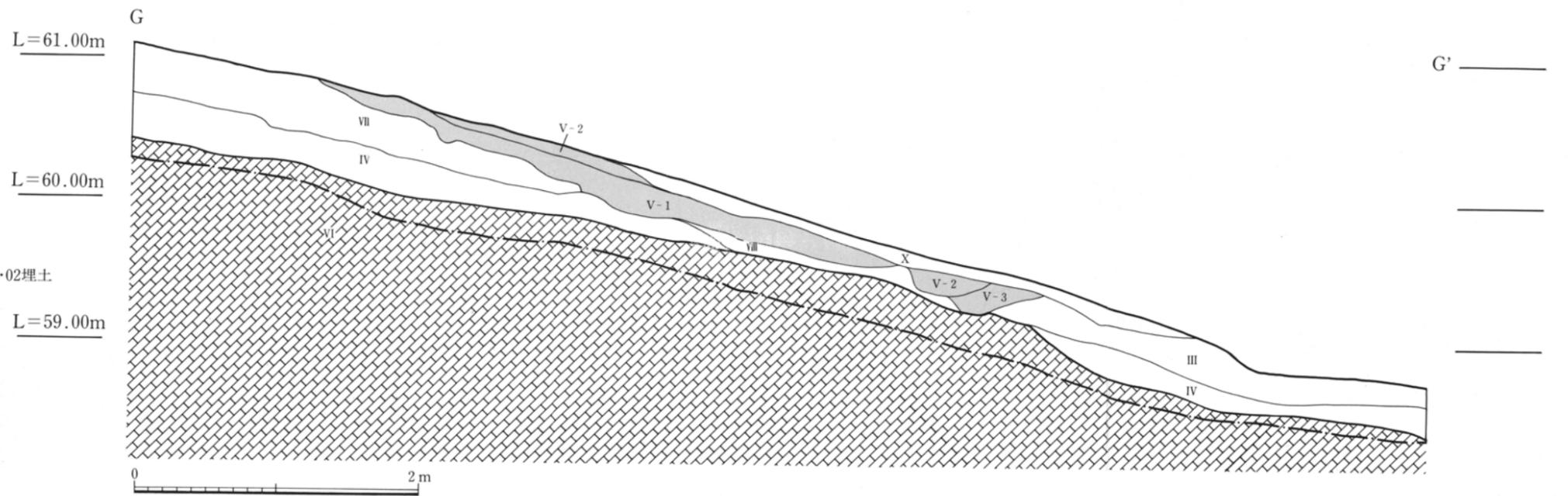
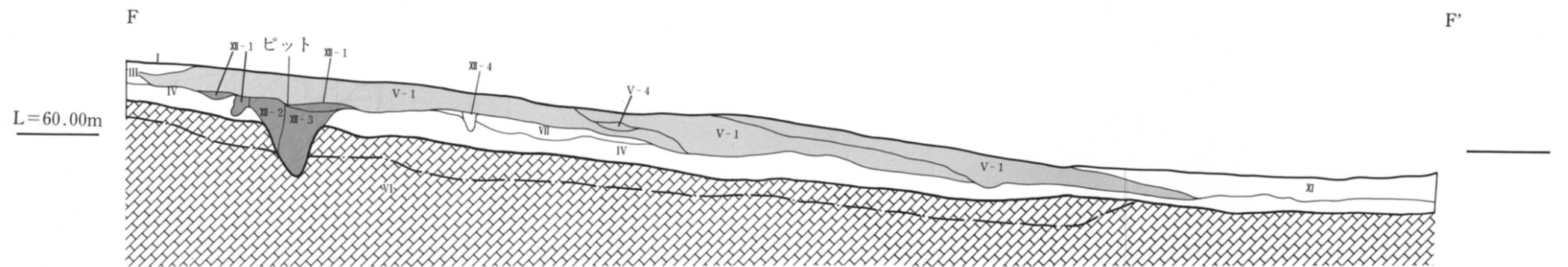
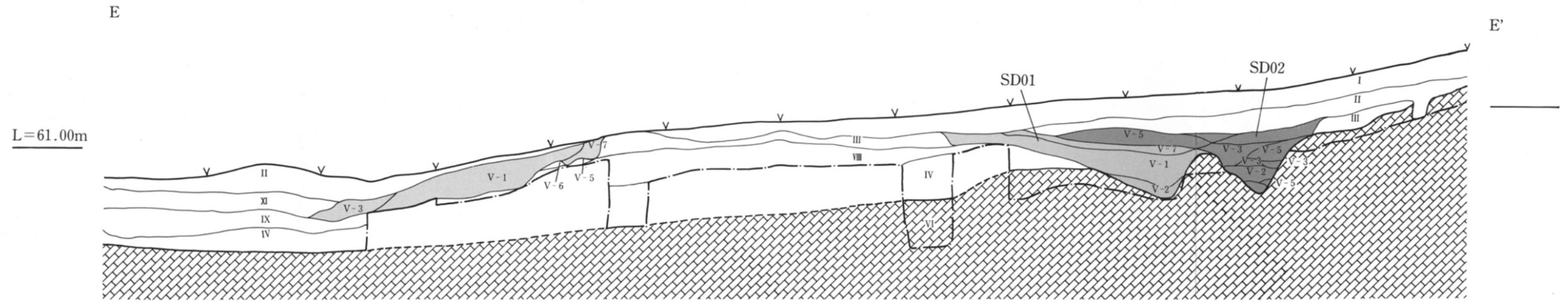


第 8 図 SY01灰原灰層検出時地形測量図 (上)

SY01灰原灰層除去後地形測量図 (下) (1 : 100)



第9図 SD01・02・SK01土層断面図 (1:40)

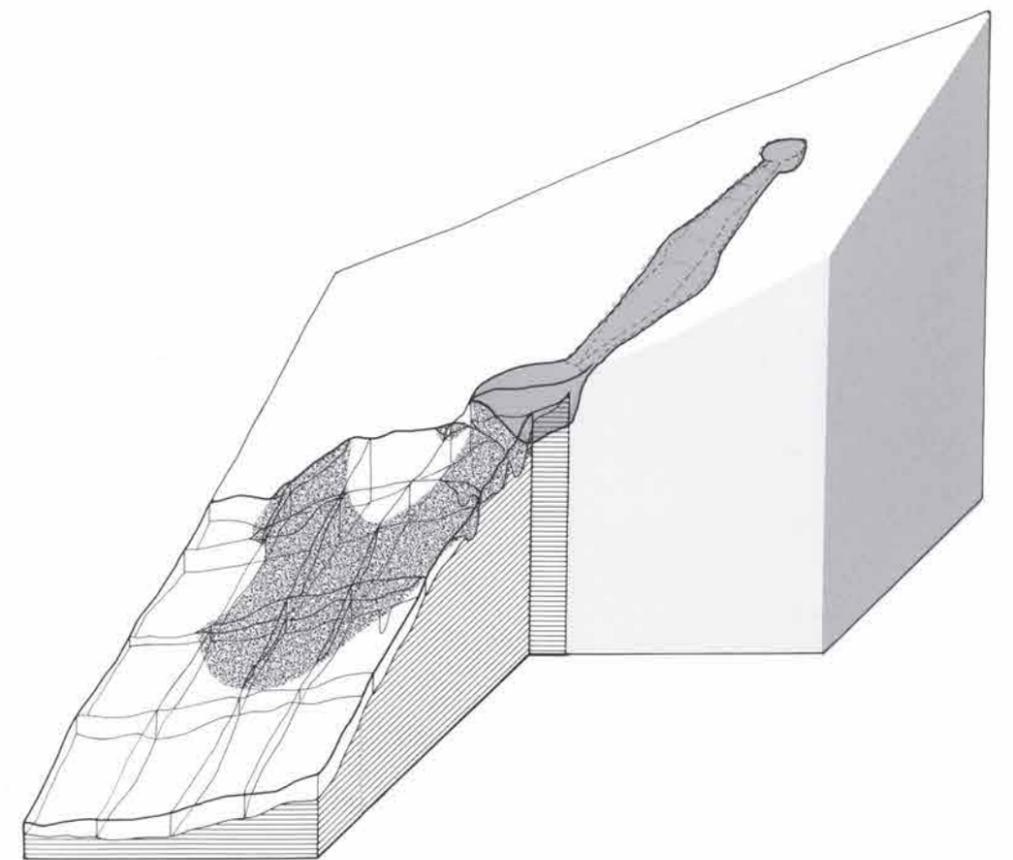
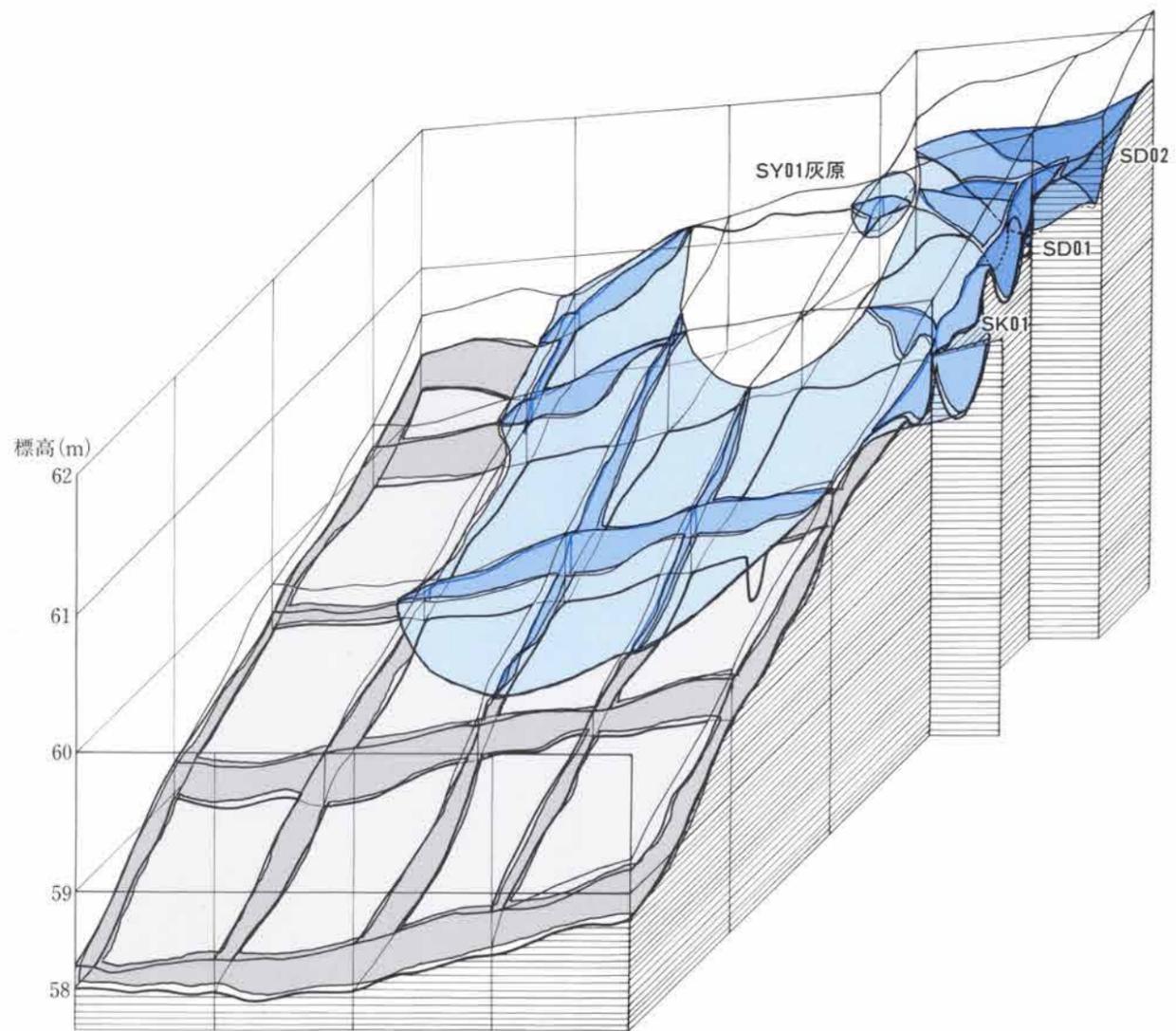


- I : 暗赤褐色砂質土 (砂礫をほとんど含まず、きめが細かい)
- II : 黄褐色砂質土 (砂礫を多く含む)
- III : 褐色砂質土
- IV : 暗褐色砂質土
- V-1 : 黒灰色砂質土 (炭、焼土を大量に含む)
- V-2 : 淡黒灰色砂質土 (炭、焼土を多く含む)
- V-3 : 灰褐色砂質土 (炭、焼土を含む)
- V-4 : 淡赤褐色砂質土+灰色砂質土 (焼土を含む)
- V-5 : 褐色砂質土 (炭、焼土を含む)
- V-6 : 暗赤褐色砂質土 (炭、焼土を含む)
- V-7 : 暗灰褐色砂質土 (炭、焼土を含む)
- VI : 赤褐色砂質土 (地山)
- VII : 明赤褐色砂質土
- VIII : 白灰色砂質土
- IX : 褐色砂質土+灰色土
- X : 灰褐色砂質土
- XI : 暗黄褐色砂質土+灰色土
- XII-1 : 灰色砂質土
- XII-2 : 白褐色砂質土
- XII-3 : 褐色砂質土 (焼土を含む)
- XII-4 : 暗褐色砂質土

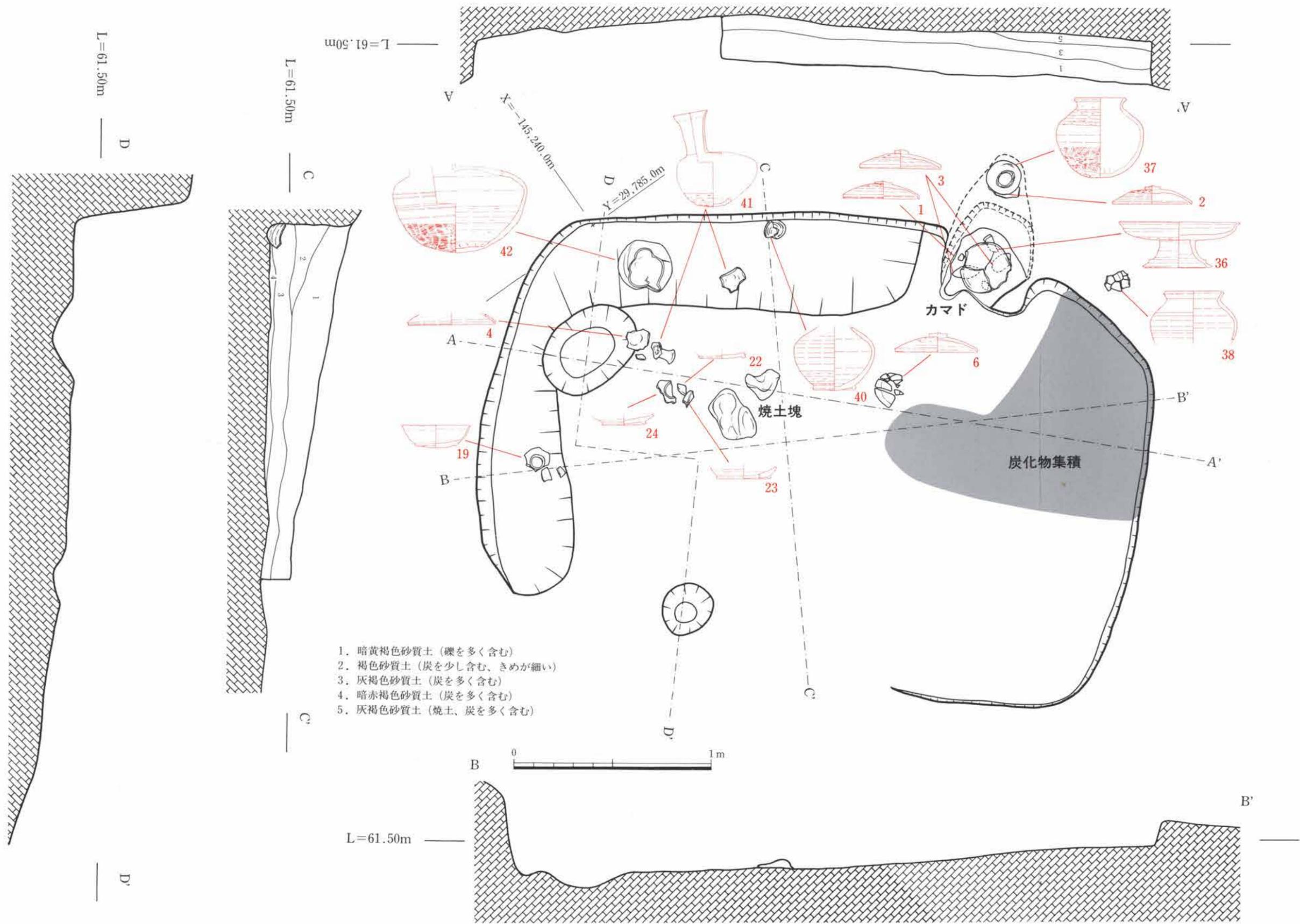
SY01灰層・SD01・02埋土

ピット埋土

第10図 SD01・02・SY01灰原土層断面図 (1:40)



第11圖 SY01灰原土層断面模式圖



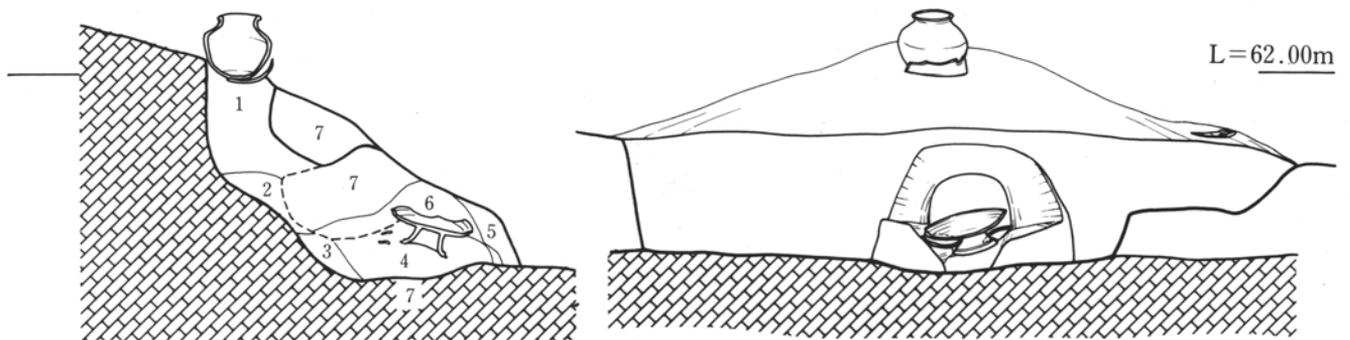
第12図 SB01平面図 (1:20)

(6) SB01 (第12・13図、図版5・6)

**A. 概要** 調査区の北西寄りに位置し、主軸は斜面の方向に直交してN-50° -Eに向く。規模は長辺が3.38m、短辺が2.42mで、検出面からの比高は最も深いところで0.60cmときわめて小型の隅丸方形を呈する。北西辺の北隅付近にカマドを有する。カマドから南側の北西辺と南西辺には幅約50cmで深さ約18cmの周溝が「L」字形にめぐる。西隅付近には長径53cm、短径38cm、深さ8cmの南北に長い楕円形のピットがあり、南東辺の中央やや南寄りにも長径28cm、短径25cm、深さ6cmの円形ピットがあるが、両者とも柱痕跡がない断面皿状のごく浅いくぼみであり、柱穴ではない。したがって、この住居跡には上屋構造を支える柱穴は存在しないことになる。また、土層の検討から張り床の痕跡も見られない。カマドの北側には炭化物の集積があり、さらに住居の西側と東側にもそれぞれ炭化物の薄いひろがりが見られた。住居の中央やや西寄りで焼土塊を検出している。カマドは別にあるため、炉跡の可能性は低い。この住居跡は窯跡SY01と関連して須恵器生産を行う作業場あるいは簡易宿泊施設としての機能を想定することができるため、この焼土塊は後述するSB02の粘土塊同様、須恵器製作用の粘土と考えることもできる。

**B. カマドの構造** カマドは先に述べたように住居の北隅近くにある。構造は地山を掘り抜いて煙道が住居の外にのびるタイプである。焚口は床面を奥行き43cm、幅45cm、深さ5cmにわたって掘りくぼめ、両側に熱効率を高めるために褐色砂質土と焼土・炭化物ブロックを用いて両側壁をつくりだす。焚口部分での床面から天井部までの高さは34cmあり、壁面は被熱のため赤く変色している。焚口内には奥に褐色砂質土と炭化物ブロックが、手前には赤褐色砂質土と大量の炭化物が堆積している。煙道はいったん水平にのびてすぐにほぼ直角に折れ曲がって開口部に達する。開口部の直径は18cmで、焚口から開口部にかけて横幅は徐々に狭まっていく。煙道部の埋土は暗褐色砂質土と淡灰褐色砂質土で、住居の廃絶時に人為的に埋め戻されている。カマドの北側には先にも述べたように炭化物の集積がある。これはカマドで煮炊きを行った際に出た灰など掻き出してここに集めておいたのであろう。

**C. 遺物の出土状況** 遺物は埋土中のももの含めると100点を超える出土量がある。うち、土師器は甕の破片が数点あるのみで、他はすべて須恵器である。床面から出土したものは遺構図にのせた20点ばかりで、それ以外はこの住居の廃絶時に窯で焼き損じた品を一括して投棄したものであろう。事実、焼け歪みのあるものや、焼成がきわめて甘いものが多い。床面からの須恵器類の多くは住居の西隅から集中して出土している。おそらく、このあたりに土器類をまとめて保管していたのであろう。これら床面出土の遺物を器種別にみると杯類と瓶類がほとんどで、住居の規模に比べて土器の量が多いことに気がつく。また、この住居跡の土器出土例のなかできわめて興味深いのはカマドから出土した一群である。まず、カマドの煙道を埋め立てたのち、須恵器杯蓋をおおむけにして開口部をふさぎ、そのうえに短頸蓋をのせている。住居廃絶時の祭祀の跡であろう。焚口内からは須恵器の高盤や杯蓋などが出土している。これらもカマドの使用を終えた後で置かれた可能性が高い。



1. 暗褐色砂質土
  2. 淡灰褐色砂質土
  3. 褐色砂質土+炭化物ブロック(少)
  4. 褐色砂質土+炭化物ブロック(多)
  5. 褐色砂質土+炭化物ブロック
  6. 褐色砂質土+焼土ブロック
  7. 褐色砂質土(地山、被熱により赤変)
- 煙道部埋土  
カマド埋土  
土堤

第13図 SB01カマド断面・立面図(1:20)

(7) SB02 (第14・15図、図版7)

**A. 概要** SB02は調査区の北東端近くで、北側の尾根の先端からわずかに南寄りにある。調査区北半は西側がゆるやかな傾斜で中央に傾斜変換点であり、そこから東が急傾斜となる。SB02はその傾斜変換点のやや東に斜面を削り込んでつくられている。主軸の方位はN-30°-Eで、斜面の包囲にほぼ合っている。調査の開始当初はこの場所を排土置き場としていたため、重機による攪乱のため住居跡の東半分は消滅している。しかし、後に述べるカマドや土器群・粘土塊などはいずれも住居跡の西半分にあったため、幸いにも良好に遺存していた。この住居跡の南北の長さは3.5mで、それにカマド部分が0.17m張り出す。東西の長さは2.4mまで確認できる。西辺での遺構検出面から住居跡床面までの比高は47cmある。周溝・張り床はなく、床面はきわめて軟らかい淡黄褐色の砂質シルトである。ピットはカマドの東側に1基あるが、浅い皿状のもので柱痕跡はなく、柱穴にはならない。SB01同様、上屋構造を支えるための柱穴はなかったものと考えられる。埋土は地山と同じ黄褐色砂質土だが、そのなかに炭化物や焼土が多く混じる。また、床面からは炭化した木材片が若干出土しており、後述する粘土塊も表面に火をうけていることなどから、この住居跡は焼失した可能性が高い。

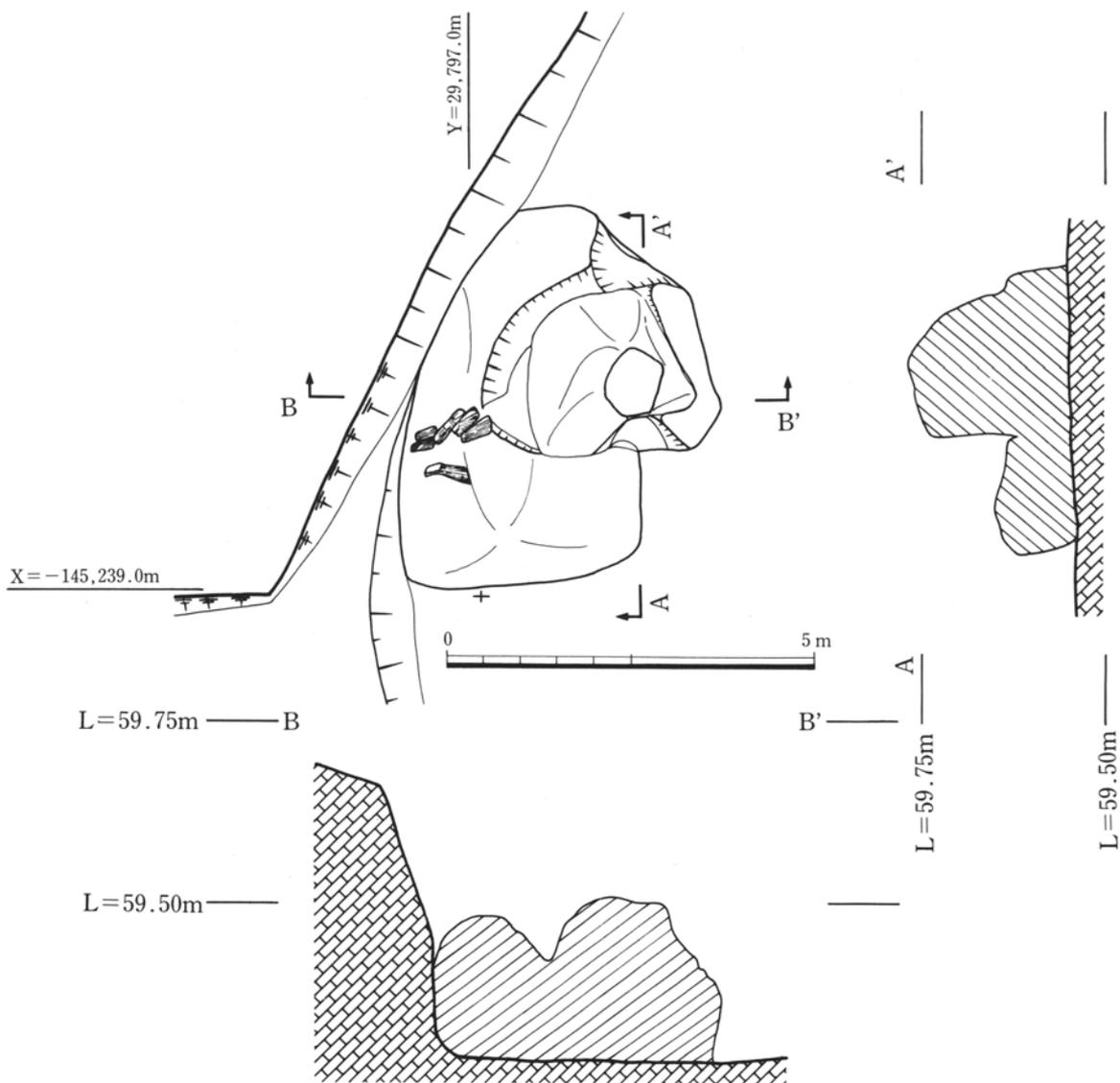
**B. カマドの構造** SB02のカマドは住居の北辺の西端近くにある。ここでSB01と共通しているのは、住居の方向は異なっているが、カマドは意識的に住居のできるだけ北端を選んで築いている点である。この住居跡のカマドはSB01のように地山を掘り込んで住居の外に長くのびる煙道をつくるタイプではなく、土や粘土で「U」字形に土堤をつくり、その下側をくり抜いて煙道をつくり、先端を住居外に出すような形になるものと思われる。土堤で「U」字形に囲まれたなかに炭化材が重なり合って出土しており、煮炊きを行ったおおよその位置が想定できる。

**C. 遺物の出土状況** カマドの西側、住居跡の北西隅から6点の土器が集中して出土している。土師器の甕と須恵器の杯・杯蓋・短頸壺である。そのほかにも須恵器の甑が出土しており、煮炊・供膳・貯蔵それぞれの機能の土器が一通りそろっている。土師器の甕には体部外面にススが付着しており、カマドで煮炊きを行ったことを如実に物語っている。これらの土器の出土状態は、この住居内での土



器類の保管位置を、ほぼそのままとどめていると見てよからう。また、埋土中からの出土もきわめて少ないことから、これらの土器類はこの住居の使用時における食器類の組み合わせをあらわしていると考えられる。そのほかに、ピットの埋土中からも1点、須恵器の杯蓋の破片が出土している。

**D. 粘土塊** 住居跡の南西隅で、西側の壁面に接して巨大な生の粘土のかたまりが出土している。大きさは、南北が1.06m、東西が0.86m、高さ0.46mで、大きな長方体の台の上に小さな立方体を重ねたようなかたちをしている。表面は前述のように部分的に被熱して赤く色が変わっているところはあるが、それ以外は淡青灰色を呈しており、若干炭化物が付着している。この住居はSB01やSY01よりも時期的に若干新しくなるが、やはりSB01同様、窯に付随する須恵器の生産にかかわる場と想定されるため、須恵器の製作に用いるために寝かせてあった粘土と考えるのが妥当であろう。



第15図 SB02粘土塊出土状態図 (1 : 10)

## 第3章 遺物

境川遺跡では、SB01・02・SK01・SD01・02・SY01灰原・包含層からコンテナで約15箱分の土器が出土した。そのうち、7世紀後半から8世紀中頃にかけての須恵器が出土土器のほとんどを占め、そのほかでは土師器・土錘・灰釉系陶器などがわずかにある。本章ではまず出土土器の器種分類について述べ、そのうえで各遺構ごとに記述を進める。法量等については出土遺物観察表にまとめた。

### (1) 器種分類について (第16図)

A. 須恵器 杯・杯蓋・椀・鉢・高杯・高盤・壺・長頸瓶・平瓶・甕がある。

杯はその形態からA~H類に分かれる。杯Aは無台で平らな底部と外上方にのびる口縁部をもち、形態や技法の差からさらに4つのタイプに細分できる。

杯A<sub>1</sub>…狭い底部に内彎気味の口縁部がつき、端部は丸く仕上げる。底部外面か口縁部下半にかけてロクロヘラケズリを施す。法量に大小があり、大きいものから杯A<sub>1</sub>I・杯A<sub>1</sub>IIとする。

杯A<sub>2</sub>…広い底部に外上方に短くのびる口縁部がつき、端部は内傾する面をもつ。底部外面に柎目板の小口面によるナデ調整(板ナデ)を施すか、ヘラ切りの痕跡を残したままの例が多い。

杯A<sub>3</sub>…狭い底部に外反する口縁部がつき、端部は外側につまみ出す。底部外面から口縁部下半にかけてロクロヘラケズリを施す。法量に大小があり、大きいものから杯A<sub>3</sub>I・杯A<sub>3</sub>IIとする。

杯A<sub>4</sub>…狭い底部に内彎する口縁部がつき、口縁端部が受け口状をなす。底部外面から口縁部下半にかけてロクロヘラケズリを施す。

杯Bは杯Aに高台がついた形態で、2タイプに分けられる。

杯B<sub>1</sub>…狭い底部にゆるやかに内彎する口縁部がつき、端部はわずかに外反する。

杯B<sub>2</sub>…広い底部に高台のやや外側で強く上方に屈曲する口縁部がつき、端部は丸く仕上げる。

杯Cは深い椀形の器形で、狭い平底に内彎する口縁部を有し、端部に内傾面をもつ。底部外面に板ナデの跡を残すものが多い。

杯Dはきわめて狭い平底から外上方に大きく開くやや深手の口縁部を有する。

杯Eは口縁部が内彎し、端部は丸く仕上げる。底部は遺存していない。

杯Fは平底に近い丸底にほぼ直立する口縁部がつく。端部は丸く肥厚して外側につまみ出す。

杯Gは内彎する口縁部に強く「く」の字状に外反する端部がつく。底部は遺存していない。

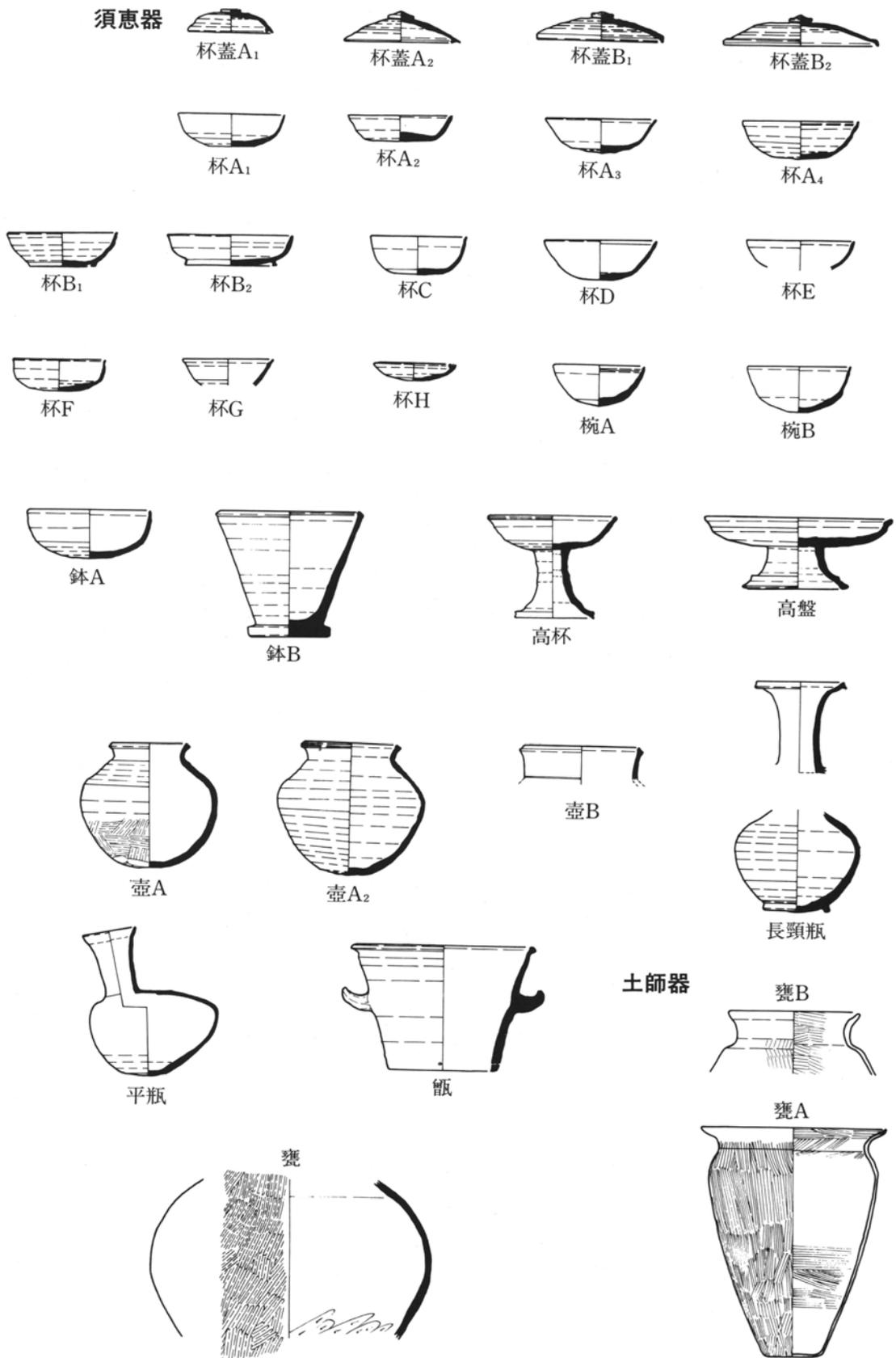
杯Hは古墳時代に通有の杯身で、口縁の立ち上がりが低く、尖底に近い器形。

杯蓋は口縁部内面にかえりをもつもの(杯蓋A)ともたないもの(杯蓋B)に分かれる。さらに、細かな形態差からそれぞれ杯蓋A<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>と杯蓋B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>に分けられる。

杯蓋A<sub>1</sub>…頂部は高く口縁部にかけてゆるやかに彎曲する。かえりは口縁端部のやや内側に粘土紐を接合してつくる。頂部には薄い円板状のツマミを貼りつける。

杯蓋A<sub>2</sub>…頂部から口縁部にかけてほぼ直線的にのび、端部を「く」の字状に折り返したかえりをもつ。頂部にはツマミは低い宝珠形をなす。

杯蓋B<sub>1</sub>…頂部から口縁部にかけて浅い笠形を呈し、端部は下垂する。ツマミは偏平な宝珠形をな



第16圖 境川遺跡出土土器器種分類表 (1:8)

す。

杯蓋B<sub>2</sub>…頂部はゆるやかに屈曲して口縁部との境で段がつき、端部は下垂する。ツマミは偏平な宝珠形である。

椀は杯よりさらに器高の高い一群を指す。A・B<sub>2</sub>形態に分かれる。椀Aは深い丸底の器形で、口縁は内彎して端部内面に沈線がめぐる。

椀Bは浅い丸底に、外上方に直線的にひろがる口縁部がつき、端部はわずかに内彎気味で内面に浅い沈線をめぐらす。

鉢はA・B<sub>2</sub>形態に分かれる。鉢Aは杯A<sub>1</sub>をひとまわり大きくしたような器形で、底部は平底に近い丸底である。

鉢Bはいわゆる播鉢で、分厚い円板状の底部に直線的にのびる深手の口縁部がつく。端部は肥厚して外傾面をなす。

高杯は杯Aに、高く裾のひろがる脚部を接合した器形。

高盤は口縁端部が「S」字状に屈曲する皿に、径が大きく低い脚部を接合する器形。

壺は口縁部の形態からA・Bの2種類に分けられる。壺Aは丸底で球形の体部に短く外反する口縁部がつく。口縁端部は肥厚して外傾面をなし、沈線をめぐらすものもある。体部下半から底部にかけてタタキを施す例(壺A<sub>1</sub>)とロクロヘラケズリを施す(壺A<sub>2</sub>)がある。

壺Bは体部が欠失しているため、全体の器形は不明である。口縁部が直立し、端部は外傾面をもつ。

長頸瓶は細長い頸部に大きく外反する口縁部をもち、体部は肩の張らない球形で、底部には高台がつく。

平瓶は丸底で偏平な体部の上面に、一方に寄せて外反する口縁部をつける。

甌は底部のすばまった円筒形で、体部の中程に牛角状の把手がつく。底部付近の把手と直交する2方向に小孔を開ける。

甕は体部のみの破片で球状を呈する。外面にタタキを、底部内面には静止ヘラケズリを施す。

**B. 土師器** 土師器としては甕が唯一の器種である。器形からA・Bに分かれる。

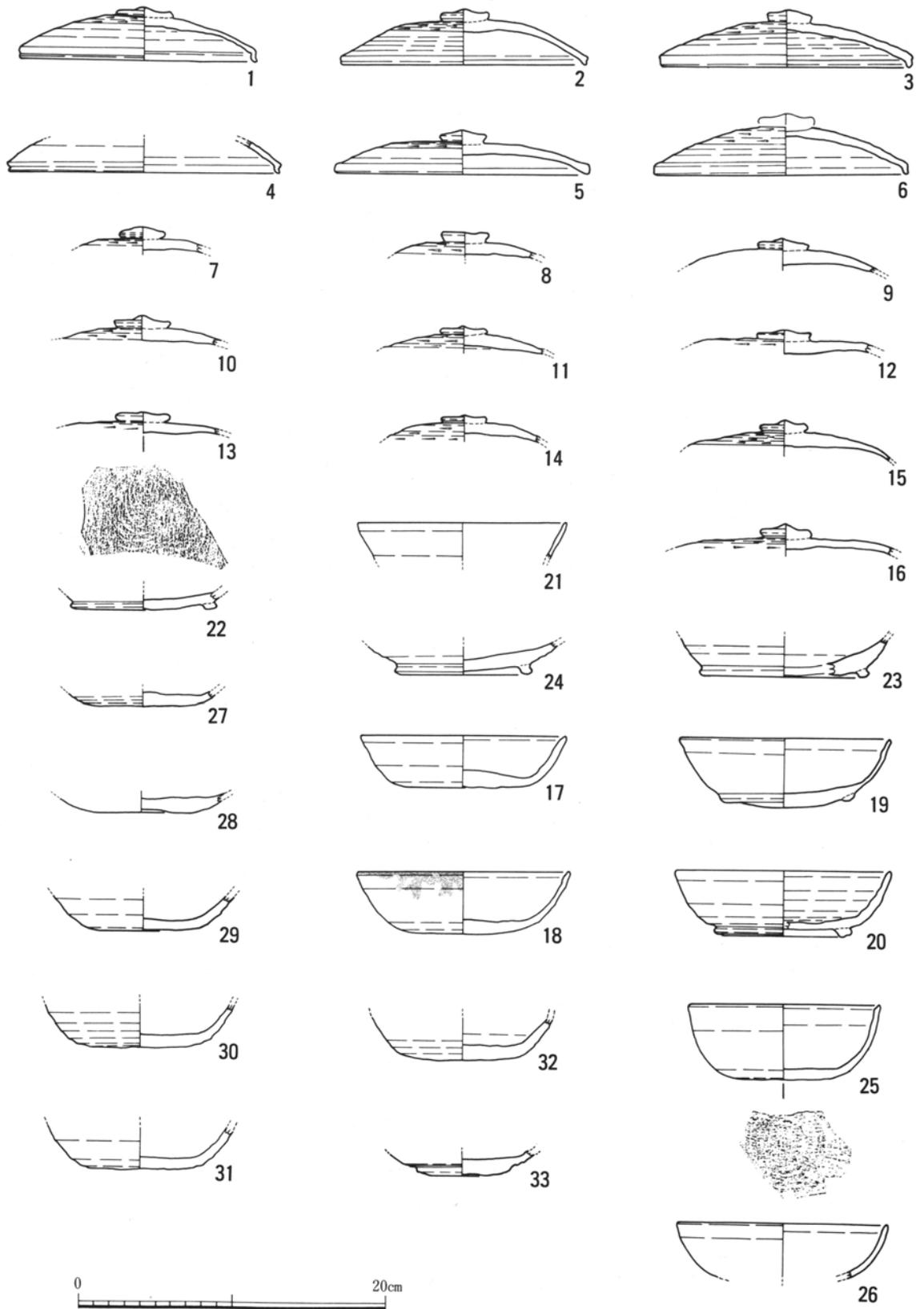
甕Aは平底で長胴、口縁部は強く外反して端部を上方につまみ出す。調整は内外面ともにハケメを施す。器壁はきわめて薄い。

甕Bは体部下半を欠失するため、全体の器形は不明である。口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸く仕上げる。内外面ともハケメを施す。

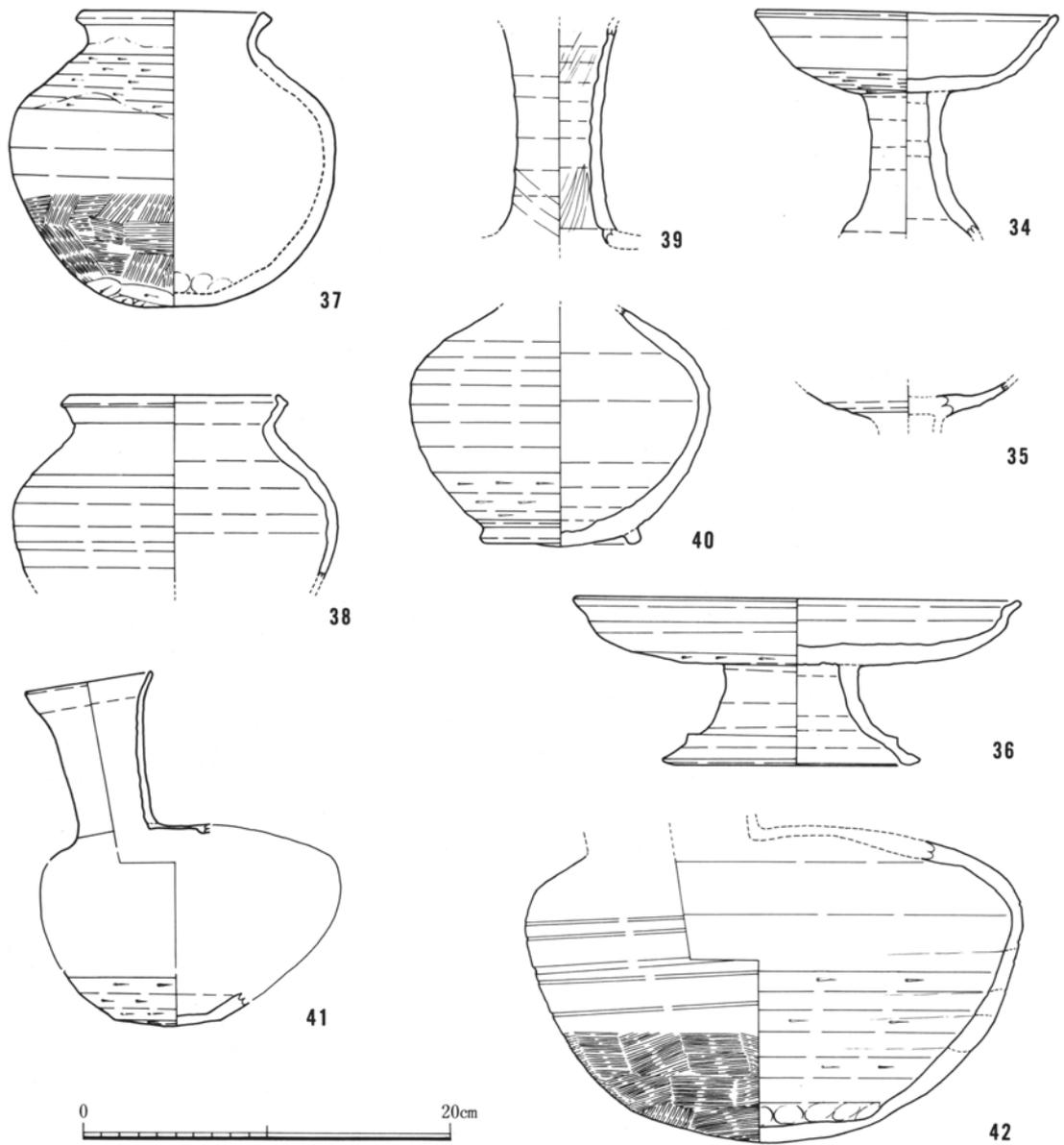
## (2) SB01(第17・18図、図版8・10)

SB01からは図示しただけで42点、そのほかに破片も含めると総数で100点を超える土器が出土している。3.4m×2.4mのきわめて小規模な竪穴住居にしては異常な土器の数の多さで、埋土中からの出土が多いこと。破損品が多いことなどから、ほとんどは住居の廃絶時に一括投棄されたものであろう。器種としては、須恵器A・杯B・杯C・杯E・杯蓋A・杯蓋B・高杯・高盤・壺A・長頸瓶・平瓶、土師器甕などがある。

須恵器杯Aで器形のわかるものとしては杯A<sub>2</sub>(17・18)がある。17は口縁部が直線的にのび、底部



第17图 SB01出土土器 1 (1:4)



第18図 SB01出土土器 2 (1:4)

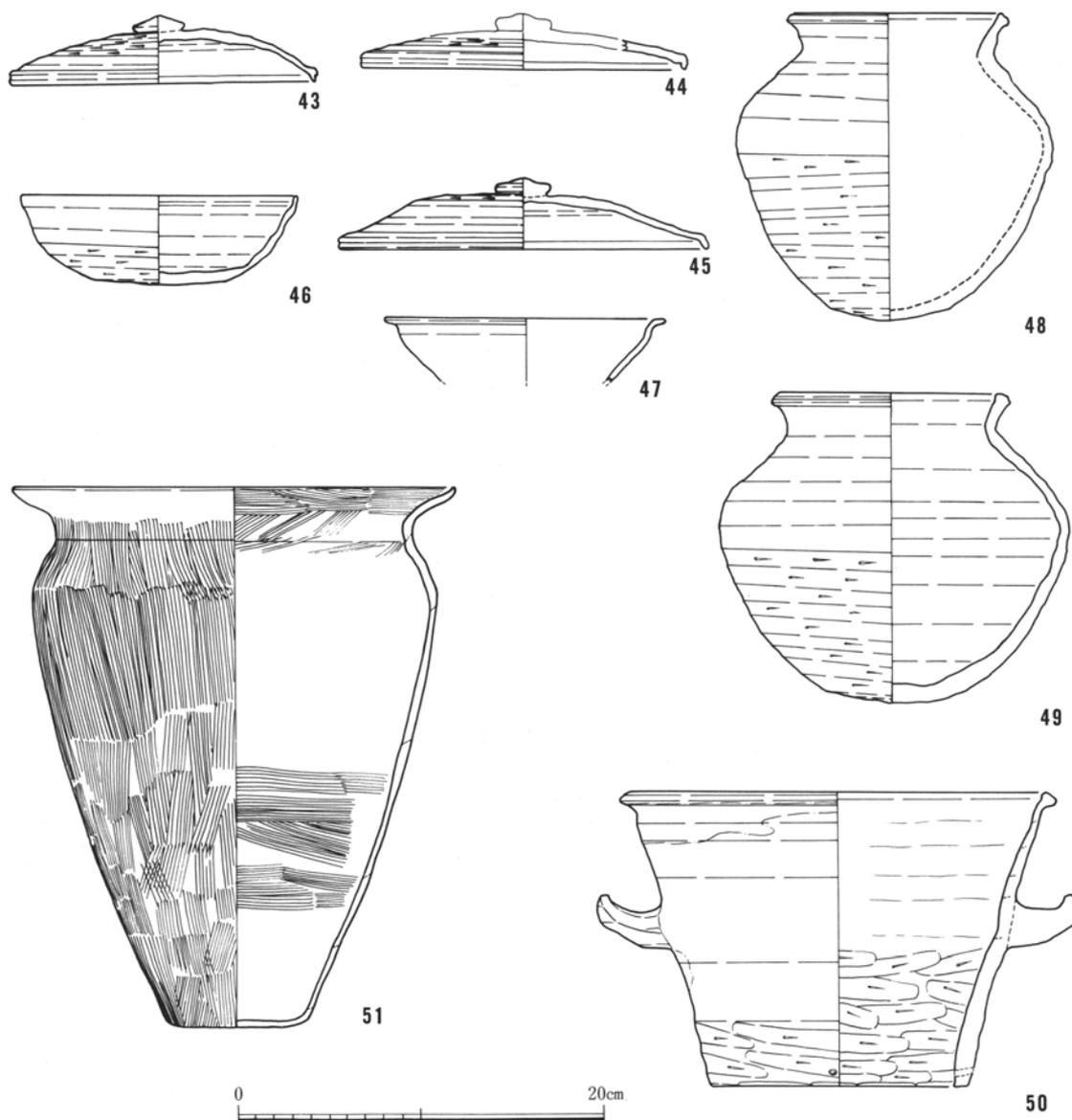
外面に板ナデの痕跡を残す。焼成は堅緻で、淡青灰色を呈する。18は口縁部が若干内彎し、端部外面に火ダスキをとどめる。焼成は堅緻で、灰白色である。杯B (19~24) はいずれも杯B<sub>1</sub>に属する。19は底部がふくらみ、退化した高台よりはみ出して丸底気味になる。口縁端部はロクロナデにより、わずかに外反する。きわめて焼成が甘く、白色を呈する。20は器壁が厚く、口縁部の内外面に著しい凹凸をとどめる。焼成は堅緻で、色調は淡灰色。21は口縁部のみ、22~24は底部のみの破片。いずれも高台は退化して底部がふくらむ。25は杯C。底部外面に板ナデを施す。焼成は堅緻、淡青灰色を呈する。26は杯Eである。焼成はわずかに甘く、色調は灰色。27~33は底部のみの破片で、28は外面に砂礫の跡をとどめ、29~31には板ナデ痕が残る。27・33はへら切後ナデ調整、32はへら切り不調整である。33は底部と口縁部の境に段がつく。いずれも杯A<sub>2</sub>あるいは杯Cの破片と思われる。1~16は杯蓋である。口縁部の遺存している1~6はすべてかえりの消失した杯蓋B<sub>1</sub>であるが、杯A<sub>2</sub>の破片もわずかで

あるが出土している。いずれもが笠形の頂部にロクロヘラケズリを施し、偏平な宝珠ツマミをつける。1・3はカマド内出土。2はカマドの煙道の開口部を埋め立てた上にあおむけに置き、さらにその上に壺A<sub>1</sub>(37)がのった状態で出土した。13は頂部内面に同心円状のあて板痕が残る。34・35は高杯である。34は脚部の裾の部分を欠失する。杯部の口縁端部内面に沈線を一条めぐらす。わずかに甘い焼成で、淡灰色を呈する。35は杯底部のみの破片である。36は高盤で、カマド内からの出土。皿部には焼成時に生じたと思われる大きな亀裂が三方にはいる。焼成はやや甘く、色調は白灰色である。37は壺A<sub>1</sub>で、カマドの煙道開口部をあおむけにしてふさいだ杯蓋(2)の上に置かれていた。口縁部は肥厚して外傾面をなす。肩部から頸部にかけてロクロヘラケズリを施し、体部下半はタタキ成形ののちロクロナデを行い、底部のみ静止ヘラケズリで仕上げる。底部には焼成時に生じた亀裂が入り、壺としての機能を喪失している。焼成はおおむね良好だが、底部付近は甘い。色調は灰白色で、肩部には淡緑褐色の自然釉が薄くかかる。38は体部下半を欠失しているが、壺A<sub>2</sub>になるものと思われる。口縁端部は内側につまみ出し、体部はロクロナデによる著しい凹凸をとどめる。焼成は堅緻で、淡青灰色を呈する。39・40は長頸瓶で、39は頸部の破片。内外面にロクロ目を残し、内面には成形時のしぼり目をとどめる。40は体部のみ依存しており、下半部にはロクロヘラケズリを施す。退化した高台がつく。焼成は甘く、色調は灰白色である。41・42は平瓶である。41は口縁部と底部のみの出土。口縁部はきわめて長く、端部にかけて大きくひろがる。底部にはロクロヘラケズリを施す。焼成は堅緻で、外面は青黒色の地に緑褐色の自然釉がかかり、内面は青灰色を呈する。42は大型品で、体部上面と口縁部を欠失する。底部は外面にタタキ、内面にはロクロヘラケズリを施す。焼成はおおむね堅緻だが、底部のみ甘い。色調は淡青灰色の地に淡緑褐色から黒灰色の自然釉がほぼ全面にかかる。

### (3) SB02 (第19図、図版9)

SB02からはカマドの西側に6点の土器が集中して出土している。43・45・46・48・49・51がそれである。そのほかには、図示したもの以外で20点ばかりの小片が出土しているのみである。器種としては、須恵器では杯A・杯B・高杯・壺A・甑があり、土師器では甕Aがある。

46は杯A<sub>4</sub>で、焼成はきわめて甘く、色調は白色である。43～45は杯蓋Bで、いずれも口縁部が屈曲する杯蓋B<sub>2</sub>である。43は頂部が笠形で口縁部が若干屈曲する。焼成は甘く、灰白色を呈する。44はピット内出土で、口縁部のみ遺存。45は頂部から口縁部にかけてゆるやかに屈曲する。焼成は堅緻で、灰白色の地に淡緑褐色の自然釉がかかる。49は口縁部が「て」の字状に屈曲する杯で、底部は欠損しており全体の器形は不明だが、高杯になるものと思われる。48・49は壺A<sub>2</sub>で、ほぼ同形同大であるが、49の方が若干肩の張りが大きい。両者とも口縁端部に外傾面をもち、48は端部上方、49は端部下方に沈線をめぐらす。48は焼成がわずかに甘く、灰白色を呈する。49の焼成も甘く、色調は白灰色で、底部外面にはススがこびりつく。50は甑である。口縁端部は肥厚して外傾面をなす。内外面とも口縁部下半には静止ヘラケズリを施す。底部付近に穿たれた小孔は簧状のものを支えるための細工であろう。焼成は堅緻で、淡灰色の地に緑褐色の自然釉がかかる。51は土師器甕Aである。器壁はきわめて薄く、成形時の粘土紐の継ぎ目を良く残す。体部外面の下半にはススがこびりつく。焼成はやや甘く色調は淡赤褐色を呈する。

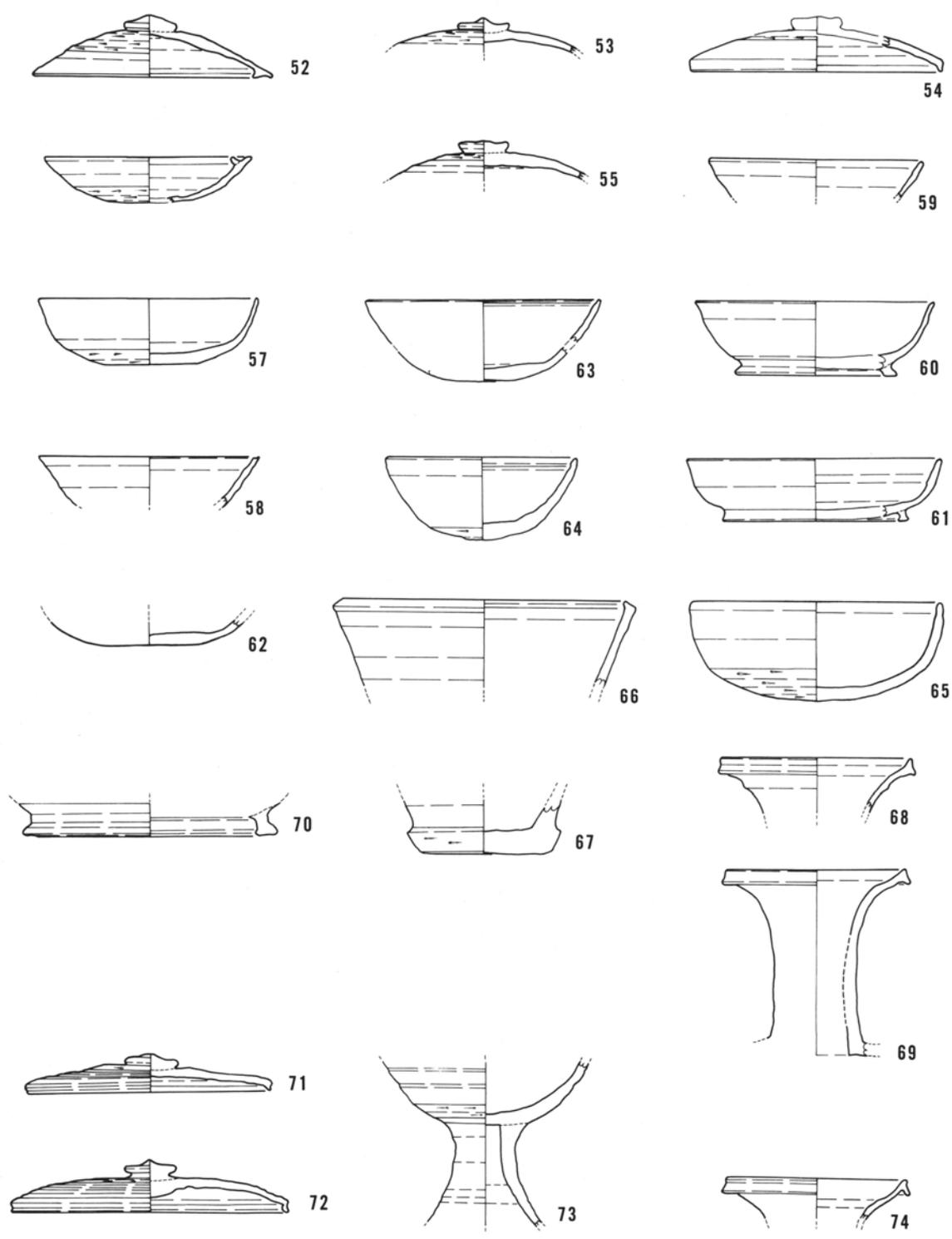


第19図 SB02出土土器 (1:4)

(4) SK01・SD02 (第20図、図版9)

SK01とSD02は一連の遺構であるため、ここでは一括してあつかう。図示した以外にも数十点の土器片が出ている。出土土器には須恵器では杯A・杯B・杯C・杯D・杯H・杯蓋A・杯蓋B・椀A・高杯・鉢A・鉢B・長頸瓶・甕、土師器では甕がある。

杯Aには、杯A<sub>1</sub>I (57) と杯A<sub>2</sub> (58) の2種類がある。57は口縁部の器壁が薄く、底部に行くにしたがって厚さを増す。底部と口縁部の境に明確な稜線がつく。焼成はやや甘く、白灰褐色を呈する。58は口縁部のみの破片で、端部に内傾面をもつ。焼成は良好で、内外面とも口縁端付近のみ黒灰色で、それ以外の部分は淡灰色である。59～61は杯Bで、うち、59・60は杯B<sub>1</sub>で、61は杯B<sub>2</sub>になる。59は口縁部のみで、端部付近が若干肥厚する。60は底部から口縁部にかけてゆるやかに内彎し、端部は強いロクロナデにより外反させる。高台は低く、外方にふんばる。焼成はわずかに甘く、白灰色を呈す



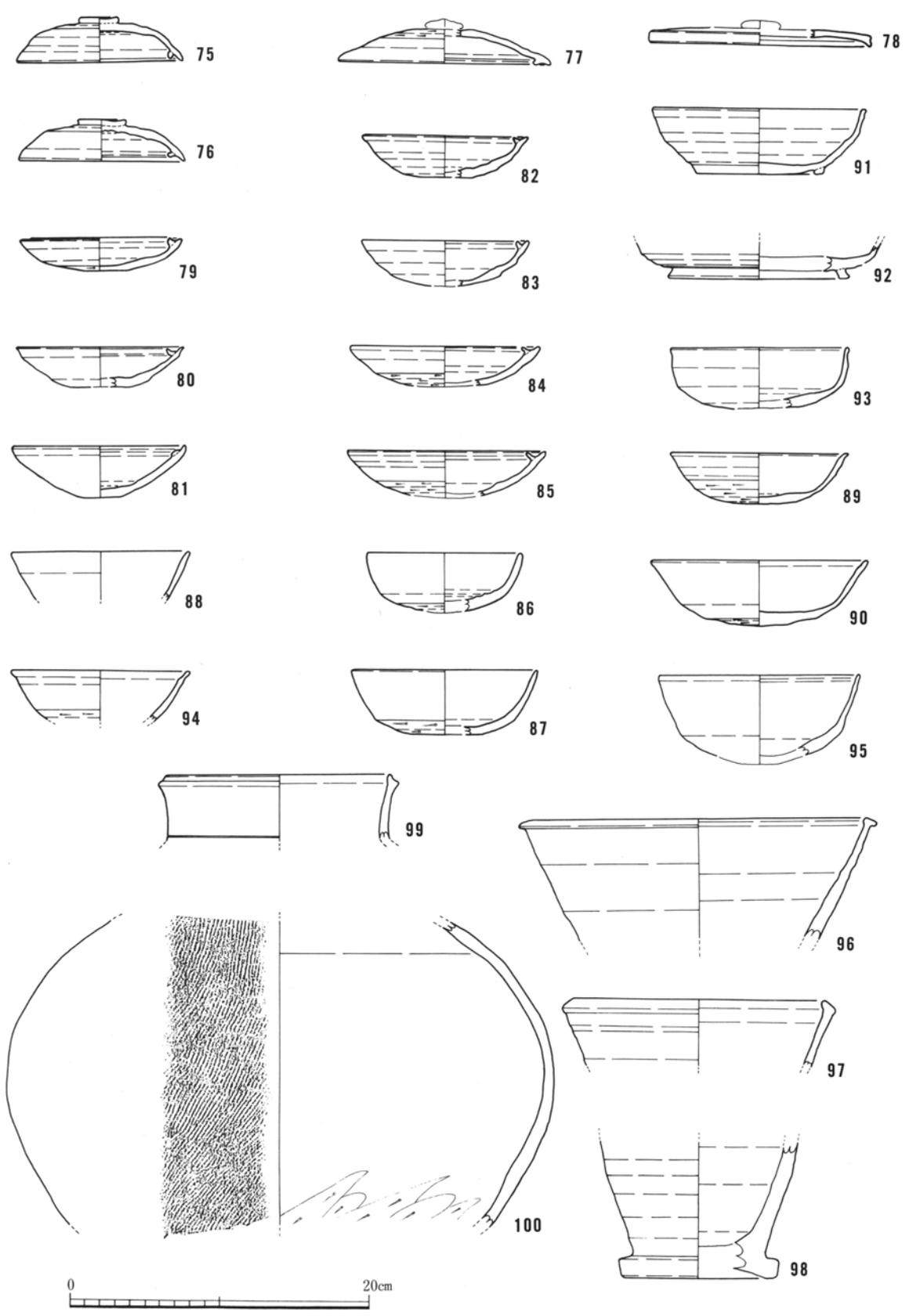
第20图 SK01·SD02出土土器 (1:4)

る。61は口径に比べて器高が低く、底部から口縁部にかけて強く屈曲する。口縁端部付近は若干肥厚する。良好な焼成で、色調は灰褐色である。62は底部のみの破片で、外面に板ナデを残す。調整や口縁部にかけての屈曲のしかたなどから杯Cになるものと思われる。杯D (63) は狭い底部分に口縁部の大きく開く椀形のもので、端部内面に沈線をめぐらす。焼成は堅緻、外面は暗灰色の色調で内面には緑褐色の自然釉がかかる。杯H (56) は平底気味で浅い器形、かえりは貼りつけによる。焼成はわずかに甘く、淡灰色を呈する。杯蓋 (52~55・71・72) には杯蓋A<sub>2</sub>と杯蓋B<sub>1</sub>がみられる。52は杯蓋A<sub>2</sub>で、頂部から口縁部にかけて直線的にのび、端部のかえりは折り返しによる。ツマミは低い宝珠形をなす。焼成は堅緻で色調は内面が暗灰色、外面は灰色の地に緑褐色の自然釉がかかる。54・71・72は杯蓋B<sub>1</sub>である。うち、54は頂部を欠失し、口縁部は短く下垂する。わずかに甘い焼成で、淡青灰色を呈する。71は頂部が扁平で、口縁端部はわずかに下垂する。扁平な宝珠ツマミを貼りつける。焼成は甘く、色調は淡灰色である。72はゆるやかな笠形の頂部で内外面に著しい凹凸をとどめ、頂部内面は大きくふくらむ。口縁端部は下方に強くつまみ出す。ツマミは扁平だか、美しい宝珠形である。やや甘い焼成で、淡灰褐色を呈する。53・55は頂部のみの破片である。扁平なツマミを貼りつけている。64は椀Aである。底部はロクロヘラケズリにより丸底に仕上げられ、口縁端部内面に沈線をめぐらす。焼成は甘く、灰白色を呈する。高杯 (73) は脚部の裾と杯部の口縁端部を欠失している。杯部は深い椀形の器形で、下半部外面にロクロヘラケズリを施す。脚部はゆるやかにひろがり、内外面に著しい凹凸をとどめる。焼成は甘く、灰白色を呈する。鉢A (65) は、ゆるやかな丸底に内彎する口縁をもち、端部内面に沈線がめぐる。焼成は甘く、色調は灰白色である。66・67は鉢Bである。いわゆる、播鉢で、円板状の底部は外面と側面にロクロヘラケズリを施す。直線的にのびる口縁部は内外面に凹凸をとどめる。端部は外傾面をなし、内側につまみ出す。焼成は堅緻で、66は淡灰褐色、67は青灰色を呈する。68~70・74は長頸瓶である。68は口縁部のみの遺存。2段に屈曲して端部はつまみ上げる。焼成は堅緻で、色調は明褐色。69は頸部から口縁部にかけて遺存している。口縁は大きく外反し、端部は折り曲げて下垂する。焼成は堅緻で、黒灰色を呈する。74は口縁部が内彎し、端部は外方に下垂する。焼成は堅緻で、白灰色の地に短緑褐色の自然釉がかかる。70は高台の破片である。厚みがあり、外方に強くふんばる。焼成は堅緻で、色調は淡灰色である。

#### (5) SY01灰原・SD01 (第21・22図、図版10)

SY01と灰原とSD01出土の遺物を一括して記述する。図示したもの以外にも多くの土器片が出土しており、総量ではコンテナ5箱を数える。器種として須器では杯A・杯B・杯F・杯G・杯H・杯蓋A・杯蓋B・鉢A・鉢B・壺B・長頸瓶・甕があり、土師器には甕B、そのほかに陶錘がある。

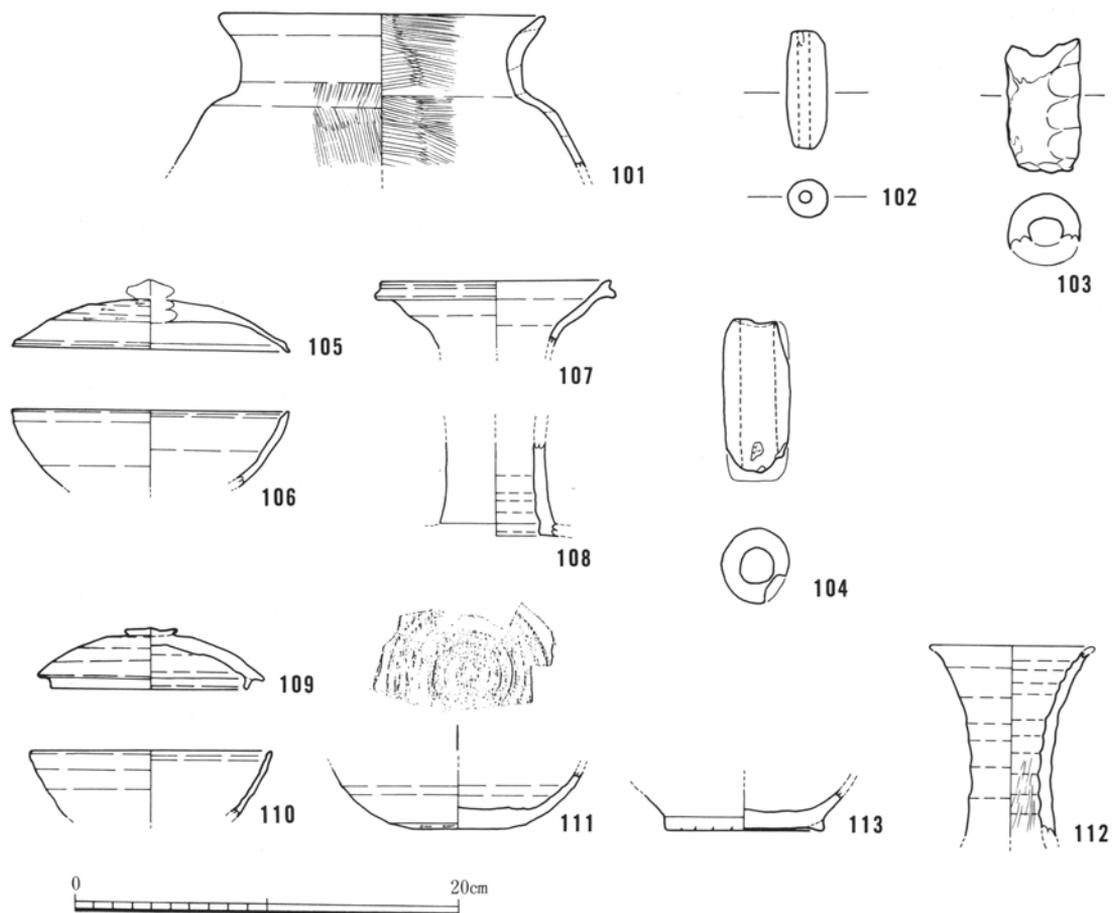
杯A (86~90) には、杯A<sub>1</sub> (86~88)・杯A<sub>2</sub> (106)・杯A<sub>3</sub> (89・90) があり、杯A<sub>1</sub>と杯A<sub>3</sub>には法量の大小がある (杯A<sub>1</sub> I・IIと杯A<sub>3</sub> I・II)。87・88は杯A<sub>1</sub> Iである。87は底部と口縁部の境に鈍い稜がつき、口縁部はゆるやかに内彎する。口縁部には焼成時に付着した須恵器片が残る。焼成は良好で色調は白褐色である。88は口縁部のみの破片である。杯A<sub>1</sub> II (86) は口径が10.45cmで器高が3.9cmと、杯A<sub>1</sub> Iに比べると一まわり小形で、やや丸底気味である。底部内面に著しい凹凸をとどめる。焼成はきわめて甘く、外面で淡灰褐色、内面では白褐色を呈する。杯A<sub>2</sub> (106) も口縁部のみの破片で、端部に内傾



第21图 SY01灰原出土土器 1 (1:4)

面をもつ。90は杯A<sub>3</sub>Iである。丸底気味の底部に大きく外反する口縁部をもち、端部は肥厚して丸く仕上げる。焼成はやや甘く、色調は灰色である。89は杯A<sub>3</sub>IIである。丸底気味で底部と口縁部の境がはっきりせず、端部は強く外反する。良好な焼成で、灰色を呈し、底部には窯壁がこびりつく。杯B(91・92)は、91が杯B<sub>1</sub>、92が杯B<sub>2</sub>である。杯B<sub>1</sub>は底部がふくらみ、退化した高台がつく。口縁部下半分は外上方にひろがり、端部付近で直立する。内外面に著しい凹凸をとどめる。甘い焼成で、暗灰白色を呈する。杯B<sub>2</sub>は口縁部上半を欠失している。口縁部下半はほぼ真横にのび、強く屈曲して直立する上半部につながる。高台は外方にふんばる。93は杯Fである。浅い丸底に直立する口縁部がつき、端部は外反する。焼成は堅緻で、外面は灰色の地に緑褐色の自然釉が厚くかぶり、内面は灰白色を呈する。杯G(94)は底部を欠失している。口縁部下半は内彎し、端部付近で「く」の字状に折れ曲がる。焼成は甘く、色調は白褐色である。79～85は杯Hである。79～82は尖底に近い平底で、83～85は丸底になる。80・81・83はへら切り後、ロクロへラケズリを行わない。かえりはいずれも口縁端部と同じ高さかそれより低く、特に81は著しく退化している。焼成は81と85が甘く、他はおおむね堅緻である。色調は79が暗灰色、80は青灰色、81は白褐色、82は暗青灰色、83は灰色、84は淡灰色、85は灰白色である。杯蓋(75～78・105)には杯蓋A<sub>1</sub>(75・76)・杯蓋A<sub>2</sub>(77)・杯蓋B<sub>1</sub>(78・105)がある。75・76は頂部にロクロへラケズリを施すが、外面には緑褐色の自然釉が厚くかぶっているため、ロクロの回転方向は不明である。端部内面の退化したかえりは貼りつけによる。いずれも焼成は堅緻で、色調は75は淡青灰色で、76は灰白色である。77はツマミが欠失している。頂部から口縁部にかけて直線的にのび、端部のかえりは内側に折り返す。焼成は堅緻で、色調は外面が淡灰色から黒褐色で、内面は淡灰褐色である。78は頂部を欠失する。偏平な器形で、口縁部は屈曲しない。端部はほとんど下垂せず、肥厚して終わる。焼成は堅緻、外面は白灰色で、内面は灰色を呈する。105もツマミを欠失している。頂部から口縁部にかけてのゆるやかに彎曲し、端部はわずかに外下方につまみ出す。焼成は堅緻で、色調は灰色の地に外面には白色の灰がかかる。95は椀Bである。器形は杯Aに似るが、丸底で口径に比して器高が高い点が特徴的である。焼成は堅緻で、外面は灰色、内面は淡灰色を呈する。96～98は鉢Bで、96・97は口縁部、98は底部の破片である。96は口縁端部を外下方につまみ出す。焼成はわずかに甘く、色調は淡灰褐色である。97は口縁端部を内側につまみ上げる。焼成は良好で、淡灰色を呈する。98は口縁部があまり開かない器形で、焼成は甘く、色調は淡灰褐色である。99は壺Bで、口縁部のみの破片である。口縁部は外反気味に直立し、端部は外傾する面をなす。口縁部と体部の境に沈線が一条めぐる。焼成は良好で、外面は灰色、内面は灰白色を呈する。107・108は長頸瓶である。107は内彎気味に大きくひろがる口縁部に、外側に下垂する端部がつく。焼成は堅緻で、色調は外面で黒褐色で、内面では白褐色を呈する。108は頸部下半の破片で、内面に著しい凹凸をとどめる。焼成は堅緻で、外面は黒灰色の地に緑褐色の自然釉がかかり、内面は灰色を呈する。100は球状の器形を呈する甕の体部の破片である。外面は上半部が縦方向、下半部は右上がりの斜方向のタタキを施し、内面はロクロナデで、底部には静止へラケズリを行う。焼成はやや甘く、色調は灰白色である。

101は土師器の甕Bである。体部上半のみ遺存している。口縁部は肥厚してゆるやかに外反し、端部はやや薄くなり、丸く仕上げる。体部は一旦肩が張り、下半部へ続いていく器形で、体部外面には縦方向の、内面は口縁部から体部にかけて横方向のハケメを施す。焼成は良好で、明褐色を呈する。



第22図 SY01灰原出土土器 2・SD01・包含層出土土器

102・103・104は陶錘である102はほぼ完形で、焼成が甘く、灰色を呈する。103は半分近くが欠失している。外面には成形時の指頭圧痕が残る。焼成は良好、色調は灰色で緑褐色の自然釉が付着する。104も完形に近く、焼成は堅緻で、色調は灰白色から灰褐色を呈する。

#### (6) 包含層 (第22図、図版10)

包含層からもコンテナ1箱分の土器が出土している。須恵器杯A・杯C・杯蓋A・長頸瓶、灰釉系陶器の椀などがある。

110は杯A<sub>2</sub>で、口縁部だけの破片。内彎気味に立ち上がり、端部内面に沈線をめぐらす。焼成は堅緻で、色調は灰白色である。111は杯Cである。口縁部上半を欠失する。底部はロクロヘラケズリにより、丸底気味に仕上げる。底部内面にへラ記号がはいる。焼成は堅緻で、灰白色を呈する。109は杯蓋A<sub>1</sub>。かえりが長く、ほぼ真下にのびる。焼成は堅緻で、灰色の地に外面には暗緑色の自然釉がかかる。112は長頸瓶の頸部である。口縁部端部を欠失する。長い外面に著しい凹凸をとどめ、内面にはしぼり目が残る。焼成は堅緻で、外面は灰褐色、内面は灰色を呈する。113は灰釉系陶器の椀で、底部のみの破片。底部外面には糸切り痕をとどめ、モミ跡の残る退化した高台がつく。胎土は良好で、焼成は堅緻、色調は灰白色である。

(7) 小結 (第23図)

以上、境川遺跡出土土器について遺構ごとに記述してきた。最後に結びとして、これらの土器の形態や器種の消長などから、各遺構のおおよその年代観や先後関係などを示すこととしたい。

まずSY01灰原であるが、古墳時代以来の器形である杯Hが半数近くを占め、杯蓋にもかえりを有するものが多い。杯蓋にはA<sub>1</sub>類 (75・76) とA<sub>2</sub>類 (77) がある。杯蓋A<sub>1</sub>の器形は頂部は高いが、かえりはすでに退化して口縁端部より外側には出ていない。杯Hは底部にロクロヘラケズリを行わないものもある。さらに口径は矮小化し、底部も尖底化しており、この器種の消滅直前にあたるものであろう。また、本来この杯Hと組み合わせべき杯蓋が1点も出土していないことも重要である。これらのことを勘案して、湖西古窯跡群における後藤健一氏の編年案にあてはめれば、ほぼⅢ-2期に相当し、7世紀後半の年代が与えられている。この時期の遺物としては75~77、79~85がそれにあたる。

78は杯蓋B<sub>1</sub>で、器高はきわめて低く、偏平だが、口縁端部の屈曲は見られない。91は底部がふくらみ、高台の下端とほぼ同じ高さにまで下がってきている。これらの特徴は後藤編年のⅢ-3~Ⅳ-2期に顕著に見られる。杯A<sub>1</sub>の出現もⅢ-3期頃であることなどから77・86~95はⅢ-3期からⅣ-2期の間となり、実年代では7世紀末~8世紀前半にあたる。96~104は年代決定の決め手を欠くが、おおむねⅢ-3期以降に属するものと思われる。

SD01はSY01灰原と一連の遺構であることから、基本的には同時期であるが、杯蓋B<sub>1</sub>は口縁端部が若干屈曲してきており、Ⅳ-2期でもやや年代的に下がり、実年代では8世紀の前半となる。

SK01・SD02は遺構の重複関係から、SD01よりも新しいことは明らかである。杯蓋ではB<sub>1</sub>類が主体を占めており (53~55・71・72)、杯類もA<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>・B<sub>1</sub>・B<sub>2</sub>・C・Dと器種にバラエティーがあることなどから、おおむねⅣ-1ないし2期に属するものと思われる。さらに、杯蓋B<sub>1</sub>のうち、71・72は器形がすでに偏平化し、口縁端部の屈曲の傾向もわずかながらあらわれていることから年代の下限はⅣ-2期でも新しいところに置くことができよう。一方、上限については杯蓋A<sub>2</sub> (52) や杯H (63) が出土していることからⅢ-2期の新しい段階となる。ただし、SD01との重複関係を考慮すればこれらはSY01灰原からの流れ込みとも考えられる。

ここで、SY01灰原・SD01・SK01・SD02の関係を整理してみると、明確な重複関係が見られるのはSD01とSD02である。さらにSD02・SK01は一連の遺構であるため、SK01とSD02はSD01より新しい。しか

遺構名	後藤編年		Ⅲ 期			Ⅳ 期			
	645	700	730	1	2	3	1	2	3
SY01灰原	[Solid bar from 645 to 730]								
SD01	[Dotted bar from 645 to 730]								
SK01	[Solid bar from 700 to 730]								
SD02	[Dotted bar from 700 to 730]								
SB01	[Solid bar from 700 to 730]								
SB02	[Solid bar from 730 to 730]								

第23図 境川遺跡遺構変遷表

し、SY01灰原はSD01と一連の遺構であるが、SK01・SD02とは層位的に明確な重複関係は認められない。むしろ、SY01灰原は、SD01にかかわる窯とSK01・SD02にかかわる窯の両方から掻き出された灰によって形成されていると考えるべきであろう。そこで、SK01とSY01灰原の出土土器を比較してみると、SY01灰原のほうが明らかに古い時期のものが多く含まれている。まず、SK01とSD02出土土器のうち52・63を除けばおおむねⅣ-2期を中心とする時期に限定できる。一方、SY01灰原のものはⅢ-2期からⅣ-2期におよぶことから、SY01灰原出土土器のなかのⅣ-2期の遺物の多くはSK01・SD02の方の窯で焼かれ、それ以前のはSD01の方の窯で焼かれたと考えるのが妥当であろう。ただ、SD01とSK01・SD02から出土している土器を比較しても大きな時期差は認められないことから、両者の窯の存続時期はきわめて近接していた可能性が高いといえよう。

次に竪穴住居跡出土の土器だが、SB01は床面出土の土器を見ると、杯蓋B<sub>1</sub>や高盤などからⅣ-1期に相当し、8世紀初頭の年代観が与えられる。ただ、埋土から出土した土器のなかにはかえりの残る杯蓋A<sub>2</sub>の破片が多く認められ、その器形はおおむねⅢ-3～Ⅳ-1期に属する。SB01埋土の土器は完形に復元できるものがほとんど無く、焼け歪みのあるものが多く認められることから窯で焼成した際の不良品を一括して廃棄した可能性が高い。しかし、これらの土器を焼成したと考えられるSY01の灰原にはⅢ-2期とⅣ-1・2期の遺物が多く出土しているのに対し、Ⅲ-3期のものがきわめて少ない。これらのことを考え合わせると、SB01の廃絶時に、どこか別の場所にまとめて置かれていたⅢ-3期の土器が一括されたのか、あるいはSY01の灰原からⅢ-3～Ⅳ-1期の遺物を含む層の土でSB01が埋め立てられたのか、いずれかの可能性が想定できる。いずれにせよ、このSB01はSY01と時期的に並行しており、場所が近接していることなどからも、両者の間にきわめて密接なかわりがあったことはまず、間違いない。そこで、このSB01の機能を推定するならば、SY01において須恵器生産を行う際の作業小屋、あるいは須恵器焼成時の番小屋に相当するものといえよう。

SB01同様、作業小屋と考えられるSB02だが、前述のごとく埋土中の遺物はほとんど無く、出土土器の示す時期がこの住居跡の存続時期をあらわしていると見てよい。杯蓋の形態を見ると、いずれも口縁端部が屈曲するB<sub>2</sub>類に相当する。これらの土器の示す特徴は、ほぼⅣ-3期以降に見られるもので、年代的には8世紀の中葉から後半にあたる。SY01灰原やSY01などではこの時期に相当する遺物が出土していないことから、このSB02はSY01とは異なる窯跡に付属する作業小屋であろう。ただし今回の調査では、分布調査も含めてSB02に関連する窯跡を見つけ出すことができなかった。

以上のことを要約すると、(1)SY01灰原はSD01関連する窯とSK01・SD02に関連する窯の2基の窯跡から掻き出された灰によって形成されている。(2)SY01灰原から出土した須恵器の示す時期幅Ⅲ-2～Ⅳ-2期におよぶ。(3)そのうち、Ⅳ-2期の多くはSK01・SD02にともなう窯跡からのものと考えられ、それ以前の遺物はSD01にともなう窯跡にかかわるものである可能性が高い。(4)SB01出土の土器は床面からのものと埋土中からのものに分けられ、それぞれ時期はⅣ-1期とⅢ-3～Ⅳ-1期に分かれる。(5)そのうち、後者の土器はSY01で焼成された不良品で、SB01の廃絶時に意識的に投棄されている。(6)SB01はSY01での須恵器生産にかかわる作業小屋の可能性が高い。(7)SB02はSY01やSB01より時期的に新しくⅣ-3期以降に属する。(8)そのため、SB02はSY01とは異なる未知の窯跡に付属する作業小屋である可能性が高い、となる。

## 第4章 まとめ

今回の発掘調査の概要をまとめると次のようになる。

- (1) 境川遺跡は、三河と遠江を分けて南から北へ流れる境川によって形成された河岸段丘の西側段丘崖に位置している。
- (2) 調査区の北側と南側に東にのびる尾根筋があり、その2つの尾根の間は浅い谷状の地形である。2つの尾根に挟まれた谷状地形の北寄りに、窯が2基以上重複して築かれている。窯体そのものは道路予定地外に位置するため、調査できなかったが、灰原(SY01灰原)と焚口からのびる排水溝2条(SD01・02)・土坑1基(SK01)と、それに付随して竪穴住居を2軒(SB01・02)検出した。
- (3) SY01灰原は窯体掘削のは廃土で築かれた前庭部の斜面に、幅約2～4mにわたって同心円状に厚さ約25の灰層が堆積していた。灰層出土の土器はコンテナにして5箱程度と量的には少ないが、時期的には7世紀後半から8世紀前半におよび、SD01・02・SK01もその時期幅のなかに含まれる。
- (4) 北側の尾根の南斜面から竪穴住居を2軒検出した。うち、SB01は一辺が3.38m×2.42mときわめて小規模な、柱穴・張り床をもたない住居跡である。北側の壁面には、地山をくり抜いて煙道が住居外にのびるタイプのカマドを構築している。この住居跡からは100点を超える土器が出土している。そのうち、大半は埋土中からのもので、SB01の廃絶時にSY01での焼き損じの須恵器が廃棄されたものと思われる。床面からの出土品は住居の西隅に集中していた。カマドには、煙道を埋め立てた後に開口部に須恵器杯蓋をあおむきに置き、その上に須恵器の短頸壺をのせていた。また、カマドの内部からも須恵器の高盤などが出土している。所属時期は、その出土土器から8世紀前半で、SY01の操業時期と重なる。そして、SY01との位置関係や規模などから、SY01での須恵器生産に関連した、作業小屋ないし窯入れ時の番小屋のような機能が想定できる。
- (5) SB01から東約10mの位置にSB02がある。一辺が3.5m×2.4m以上とSB01同様きわめて小規模で、柱穴・張り床はない。カマドの構造はSB01とは異なり、「U」字形に土堤をつくり、その下側をくり抜いて煙道をつくり住居外に出すタイプと思われる。出土遺物は、カマドの西側で住居のコーナーから煮炊・共膳・貯蔵それぞれの機能の土器が1セット分、この住居が廃絶した当時の位置をほぼ保ったまま出土した。時期は8世紀中葉から後半に属し、SY01・SB01より新しい。この住居跡の南西隅から巨大な生の粘土が出土した。これはSB02の性格を考えると、須恵器の製作に用いるために寝かせてあった可能性が高い。ただし、この住居跡の時期に相当する窯跡は未だ見つかっていない。

最後に、湖西古窯跡群における境川遺跡の位置づけについて少し考えてみたい。境川遺跡の周辺には多くの窯跡がある。石川明弘氏はこれらの窯跡を湖西古窯跡群とは区別して一里山古窯址(跡)群という名称で報告している<sup>1)</sup>。しかし、第3図でもわかるように、三河と遠江を分ける境川が一里山古窯跡群と湖西古窯跡群を明確に区分しているわけではない。東三河で一里山より西の地域には、二川などに平安時代以降の窯跡群はあるが、奈良時代以前の大規模な窯跡群は知られていない。また、石川氏の言うところの一里山古窯跡群中に位置する境川遺跡で焼かれた須恵器は、器形・器種組成など

湖西古窯跡群の製品と共通しており、あえてそれらと区別した名称をつける意味は無い。むしろ、湖西古窯跡群一里山地区とし、境川の西岸に分布する窯跡はさらに境川支群と呼ぶべきであろう。

そこで問題となるのは、この一里山地区で須恵器生産を行った集団の帰属である。湖西古窯跡群では窯跡に近接して作業場とみられる住居や平場が築かれる例が多い。しかし、住居跡の付設はほぼ7世紀の中葉までで、それ以降はせいぜい平場をつくるか土坑を掘る程度となる<sup>2)</sup>。その一方で、窯跡が築かれる丘陵の先端に集落を営み、須恵器の生産から出荷までを一貫してこの生活の場で行うようになる。湖西市の吉美中村遺跡はその好例である。境川遺跡では、7世紀後半に生産を開始するにもかかわらず、小型ながらしっかりとしたカマドをもつ住居跡を有し、8世紀中葉にはあらたに別の住居跡を築いている。一方、境川遺跡の周辺には吉美中村遺跡に相当するような集落遺跡の存在は知られていない。そして、湖西古窯跡群の中心地域では窯跡に付属した作業場をもたなくなった時期に、境川遺跡ではなおも住居跡を築いている。このことから、境川遺跡に代表される一里山地区で須恵器生産を行った集団の性格をきわめて単純に考えると次のようになる。彼らはこの三河国一里山の地で須恵器生産を行ってはいたが、その周辺に集落を築くことはなく、彼らの本拠地である遠江国湖西の地域から須恵器作りに好適な地形や粘土を求めてこの地に出向き、窯入れをするごく短期間のみ生活するための住居を窯の近くに築いたのであろう。もしそうであるならば、当時の国境の観念など、また別の興味深い問題がでてくる。

湖西古窯跡群の須恵器は関東から東北地方にかけてその分布が多く認められることから、これらの地域における遺跡の年代観の基準資料となっている。一方、東三河では近年、古代の集落跡の調査例が徐々に増加しており、これらの遺跡からも大量の須恵器が出土している<sup>4)</sup>。しかし、これらの須恵器は現在のところ、ほとんど研究の対象となっていない。そこで、今後は湖西古窯跡群と東三河の集落遺跡を須恵器の生産地と消費地の観点から見つめ直すことが必要であろう。

この湖西古窯跡群一里山地区における発掘調査はまだ始まったばかりであり、今後の調査例の増加により、この地の須恵器生産の実態もいずれ明らかになる日がくるであろう。

註) 1. 石川明弘「一里山古窯址群」『中田古窯址群』1982

2. 後藤健一「6世紀を中心とした湖西古窯跡群の諸様相」『西笠子第64号窯跡発掘調査報告書』1987

3. 湖西市教育委員会『吉美 中村遺跡』湖西市文化財調査報告書第25集 1990

4. 市道遺跡・森岡遺跡・麻生田大橋遺跡などがある。

# 出土遺物観察表

## SB01

番号	登録番号	器種名	法 量	備 考
1	E-14	須恵器・杯蓋B <sub>1</sub>	口径15.7cm 器高3.5cm	カマド内出土
2	E-18	須恵器・杯蓋B <sub>1</sub>	口径16.2cm 器高3.7cm	カマド煙道部出土
3	E-13	須恵器・杯蓋B <sub>1</sub>	口径16.7cm 器高3.8cm	カマド内出土
4	E-5	須恵器・杯蓋B <sub>1</sub>	口径18.0cm 残存高2.2cm	床面出土
5	E-15	須恵器・杯蓋B <sub>1</sub>	口径16.9cm 器高2.9cm	
6	E-10	須恵器・杯蓋B <sub>1</sub>	口径16.6cm 残存在高3.2cm	床面出土
7	E-24	須恵器・杯蓋B <sub>1</sub>	残存高1.8cm	
8	E-100	須恵器・杯蓋B <sub>1</sub>	残存高1.7cm	
9	E-22	須恵器・杯蓋B <sub>1</sub>	残存高2.1cm	
10	E-21	須恵器・杯蓋B <sub>1</sub>	残存高1.9cm	
11	E-99	須恵器・杯蓋B <sub>1</sub>	残存高1.7cm	
12	E-27	須恵器・杯蓋B <sub>1</sub>	残存高1.55cm	
13	E-28	須恵器・杯蓋B <sub>1</sub>	残存高1.5cm	
14	E-23	須恵器・杯蓋B <sub>1</sub>	残存高1.85cm	
15	E-6	須恵器・杯蓋B <sub>1</sub>	残存高2.7cm	床面出土
16	E-26	須恵器・杯蓋B <sub>1</sub>	残存高2.1cm	
17	E-105	須恵器・杯A <sub>2</sub>	復元径13.5cm 器高3.4cm	
18	E-106	須恵器・杯A <sub>2</sub>	復元径14.0cm 器高4.1cm	
19	E-1	須恵器・杯B <sub>1</sub>	口径14.0cm 器高4.7cm	床面出土
20	E-104	須恵器・杯B <sub>1</sub>	復元径14.2cm 器高4.35cm	
21	E-111	須恵器・杯B <sub>1</sub>	復元径13.8cm 残存高2.5cm	
22	E-4	須恵器・杯B <sub>1</sub>	底部復元径9.6cm 残存高1.15cm	床面出土
23	E-3	須恵器・杯B <sub>1</sub>	底部復元径11.2cm 残存高2.7cm	床面出土
24	E-2	須恵器・杯B <sub>1</sub>	底部径9.0cm 残存2.1cm	床面出土
25	E-20	須恵器・杯C	復元径12.8cm 器高4.9cm	
26	E-110	須恵器・杯E	復元径13.9cm 残存高3.6cm	
27	E-25	須恵器・杯A <sub>2</sub> orC	残存径0.95cm	
28	E-29	須恵器・杯A <sub>2</sub> orC	残存高1.4cm	
29	E-30	須恵器・杯A <sub>2</sub> orC	残存高2.3cm	
30	E-108	須恵器・杯A <sub>2</sub> orC	残存高2.95cm	
31	E-107	須恵器・杯A <sub>2</sub> orC	残存高2.8cm	
32	E-109	須恵器・杯A <sub>2</sub> orC	残存高2.85cm	
33	E-112	須恵器・杯A <sub>2</sub> orC	残存高1.65cm	
34	E-16	須恵器・高杯	口径16.7cm 残存高12.6cm	
35	E-19	須恵器・高杯	残存高2.8cm	
36	E-12	須恵器・高盤	口径24.4cm 器高9.3cm	カマド内出土
37	E-9	須恵器・壺A <sub>1</sub>	口径10.65cm 器高16.25cm	カマド煙道部出土
38	E-11	須恵器・壺A <sub>2</sub>	口径12.3cm 残存高10.1cm	住居周壁肩部出土
39	E-113	須恵器・長頸瓶	頸部最大径6.6cm 残存高11.9cm	
40	E-17	須恵器・長頸瓶	胴部最大径16.3cm 残存高13.1cm	床面出土
41	E-8	須恵器・平瓶	口径7.05cm	床面出土
42	E-7	須恵器・平瓶	胴部最大径27.1cm 残存高16.5cm	床面出土

## SB02

43	E-36	須恵器・杯蓋B <sub>2</sub>	口径17.0cm 器高3.8cm	床面出土
44	E-38	須恵器・杯蓋B <sub>2</sub>	口径18.0cm 残存高1.6cm	ピット内出土
45	E-35	須恵器・杯蓋B <sub>2</sub>	口径20.4cm 器高3.9cm	床面出土
46	E-37	須恵器・杯A <sub>4</sub>	口径15.3cm 器高5.0cm	床面出土
47	E-39	須恵器・高杯	復元径15.4cm 器高3.5cm	
48	E-33	須恵器・壺A <sub>2</sub>	口径12.1cm 器高16.95cm	床面出土
49	E-34	須恵器・壺A <sub>2</sub>	口径13.1cm 器高17.2cm	床面出土
50	E-40	須恵器・甌	口径23.9cm 器高16.25cm	
51	E-32	須恵器・甕A	口径24.2cm 器高30.1cm	床面出土

## SK01

52	E-41	須恵器・杯蓋A <sub>2</sub>	口径15.1cm 器高4.0cm	
53	E-44	須恵器・杯蓋	残存高2.2cm	
54	E-42	須恵器・杯蓋B <sub>1</sub>	復元径16.0cm 残存高2.3cm	
55	E-43	須恵器・杯蓋	残存高2.5cm	
56	E-45	須恵器・杯H	復元径13.0cm 器高2.9cm	
57	E-49	須恵器・杯A <sub>1</sub> I	復元径13.9cm 器高4.2cm	
58	E-55	須恵器・杯A <sub>2</sub>	復元径14.0cm 残存高3.2cm	
59	E-54	須恵器・杯B <sub>1</sub>	復元径13.6cm 器高2.4cm	

59	E-54	須惠器・杯B <sub>1</sub>	復元徑13.6cm 器高2.4cm	
60	E-46	須惠器・杯B <sub>1</sub>	復元徑15.2cm 器高4.7cm	
61	E-47	須惠器・杯B <sub>2</sub>	復元16.2cm 器高4.0cm	
62	E-51	須惠器・杯C	殘存高1.6cm	
63	E-52	須惠器・杯蓋D	復元徑14.9cm 復元高5.2cm	
64	E-53	須惠器・椀A	復元徑12.1cm 器高5.3cm	
65	E-56	須惠器・鉢A	口徑16.1cm 器高6.35cm	
66	E-57	須惠器・鉢B	復元徑19.2cm 殘存高5.5cm	
67	E-58	須惠器・鉢B	底部徑9.7cm 器高3.6cm	
68	E-59	須惠器・長頸瓶	復元徑12.6cm 殘存高3.5cm	
69	E-60	須惠器・長頸瓶	口徑11.9cm 殘存高11.8cm	
70	E-48	須惠器・長頸瓶	底部徑16.0cm 殘存高2.1cm	

## SD02

71	E-66	須惠器・杯蓋B <sub>1</sub>	口徑15.6cm 器高2.5cm	
72	E-67	須惠器・杯蓋B <sub>1</sub>	口徑17.4cm 器高3.15cm	
73	E-68	須惠器・高杯	殘存高10.5cm	
74	E-69	須惠器・長頸瓶	復元徑12.0cm 殘存高2.6cm	

## SY01灰原

75	E-73	須惠器・杯蓋A <sub>1</sub>	口徑11.2cm 器高3.0cm	
76	E-74	須惠器・杯蓋A <sub>1</sub>	復元徑11.1cm 器高2.8cm	
77	E-75	須惠器・杯蓋A <sub>2</sub>	復元徑14.2cm 殘存高2.3cm	
78	E-76	須惠器・杯蓋B <sub>1</sub>	復元徑15.0cm 殘存高1.1cm	
79	E-77	須惠器・杯H	口徑10.9cm 器高2.25cm	
80	E-78	須惠器・杯H	復元徑11.2cm 器高2.7cm	
81	E-80	須惠器・杯H	復元徑11.7cm 器高3.5cm	
82	E-79	須惠器・杯H	復元徑11.2cm 器高2.8cm	
83	E-81	須惠器・杯H	復元徑11.3cm 器高3.1cm	
84	E-82	須惠器・杯H	復元徑12.8cm 殘存高2.65cm	
85	E-83	須惠器・杯H	復元徑13.3cm 殘存高3.05cm	
86	E-86	須惠器・杯A <sub>1</sub> II	口徑10.45cm 殘存高3.9cm	
87	E-90	須惠器・杯A <sub>1</sub> I	復元徑12.4cm 器高4.35cm	
88	E-88	須惠器・杯A <sub>1</sub> I	復元徑12.0cm 器高3.3cm	
89	E-89	須惠器・杯A <sub>3</sub> II	復元徑12.0cm 器高3.4cm	
90	E-92	須惠器・杯A <sub>3</sub> I	復元徑14.7cm 器高3.4cm	
91	E-84	須惠器・杯B <sub>1</sub>	復元徑14.4cm 器高4.45cm	
92	E-85	須惠器・杯B <sub>2</sub>	底部復元徑12.2cm 殘存高2.5cm	
93	E-91	須惠器・杯F	復元徑11.9cm 器高4.1cm	
94	E-87	須惠器・杯G	復元徑12.0cm 殘存高3.4cm	
95	E-93	須惠器・椀B	復元徑13.5cm 殘存高5.4cm	
96	E-96	須惠器・鉢B	復元徑24.2cm 殘存高8.2cm	
97	E-95	須惠器・鉢B	復元徑18.3cm 殘存高4.5cm	
98	E-97	須惠器・鉢B	底部復元徑10.8cm 殘存高9.3cm	
99	E-94	須惠器・壺B	復元徑16.2cm 殘存高4.4cm	
100	E-98	須惠器・甕	胴部最大徑36.5cm 殘存高20.5cm	
101	E-70	須惠器・甕B	復元徑17.2cm 殘存高8.0cm	
102	E-71	陶錘	全長6.3cm 最大徑2.15cm	
103	E-72	陶錘	殘存長7.1cm 最大徑4.0cm	

## SD01

104	E-65	陶錘	殘存長8.1cm 最大徑3.6cm	
105	E-61	須惠器・杯蓋B <sub>1</sub>	復元徑14.4cm 殘存高2.6cm	
106	E-62	須惠器・杯A <sub>2</sub>	復元徑14.2cm 殘存高4.1cm	
107	E-63	須惠器・長頸瓶	復元徑12.5cm 殘存高3.5cm	
108	E-64	須惠器・長頸瓶	頸部最大徑6.0cm 殘存高5.0cm	

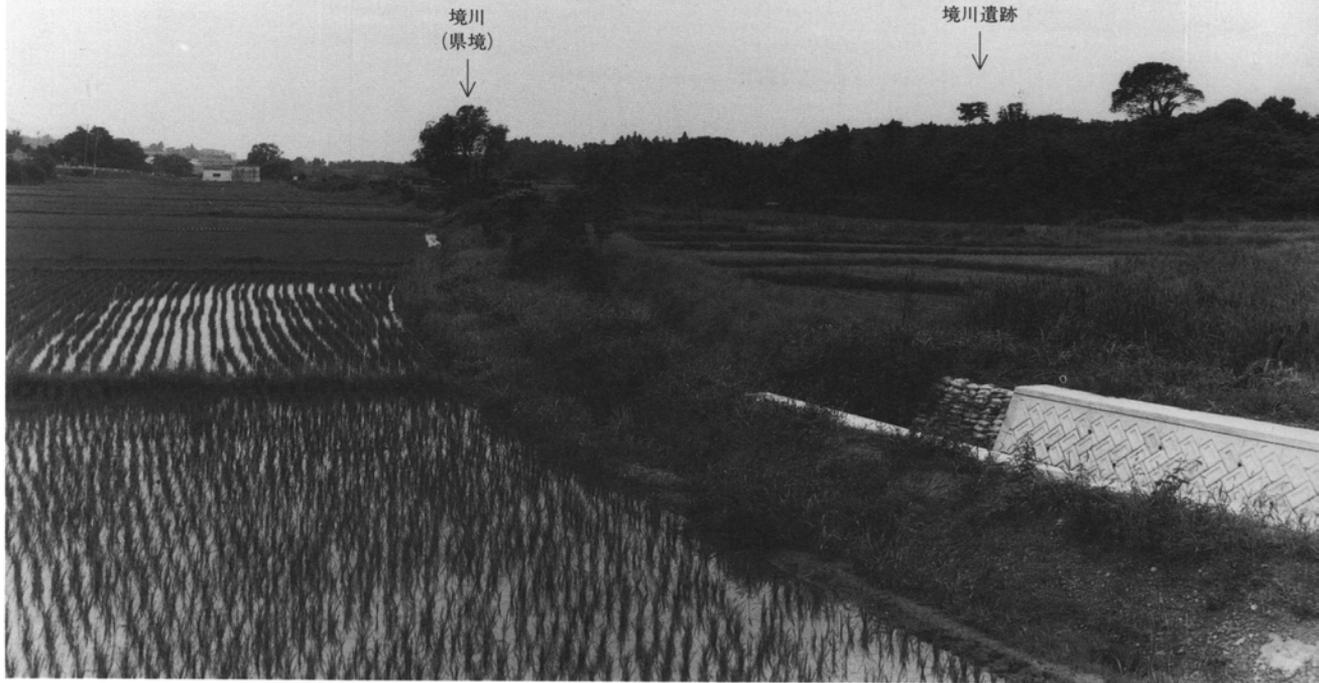
## 包含層

109	E-114	須惠器・杯蓋A <sub>1</sub>	口徑12.0cm 器高3.2cm	
110	E-115	須惠器・杯A <sub>2</sub>	口徑12.7cm 器高3.5cm	
111	E-116	須惠器・杯C	殘存高3.15cm	
112	E-117	須惠器・長頸瓶	頸部最大徑8.2cm 殘存高9.7cm	
113	E-118	灰釉系陶器・椀	底部徑8.3cm 殘存高2.2cm	

# 図 版



境川遺跡遠景（静岡県側から）



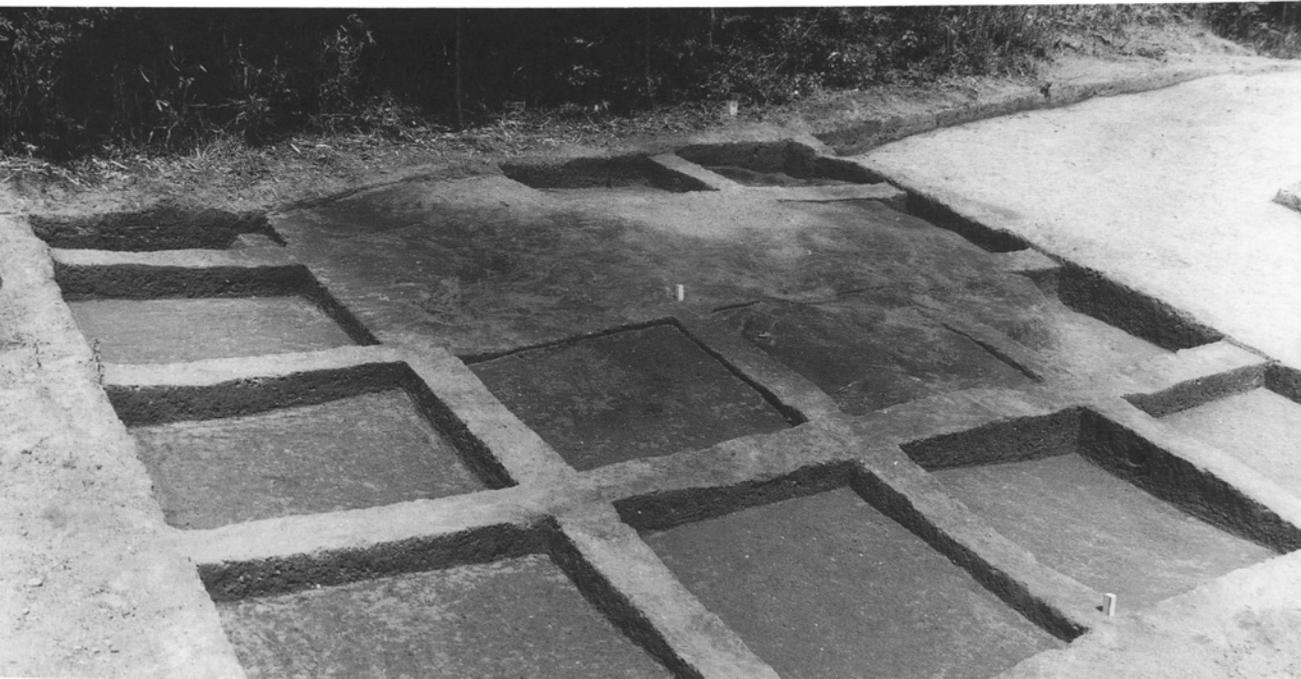
遺跡遠景 北から



調査区全景 南から



SY01灰原  
検出状況  
南東から



SY01灰原  
灰層検出状況  
南東から

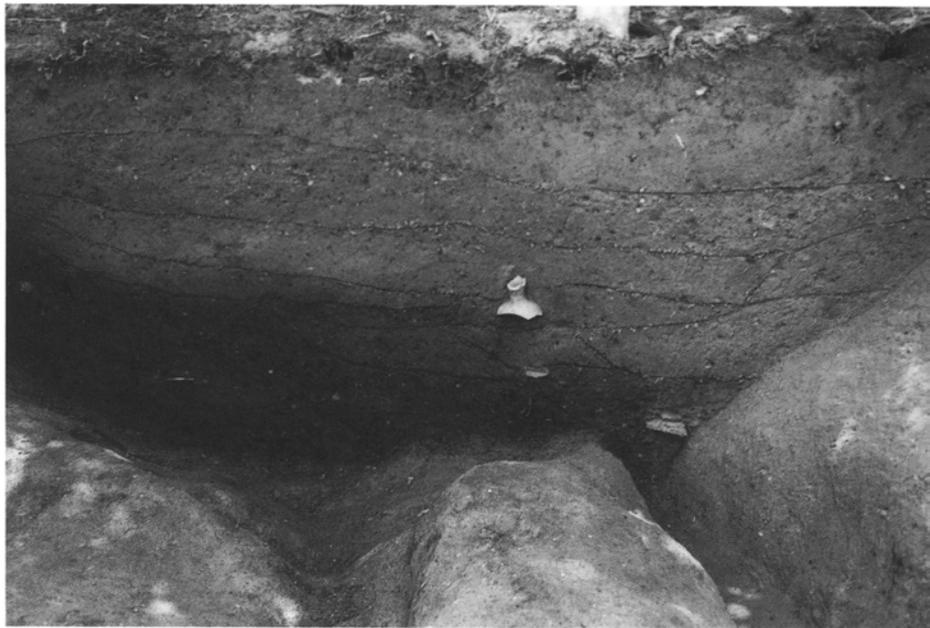


SY01灰原  
灰層除去状況  
南東から

SD01(左)・SD02(右)  
土層断面  
東から



SD01(左)・SD02(右)  
土層断面(西拡張部分)  
東から



SY01  
灰層堆積状況  
南東から

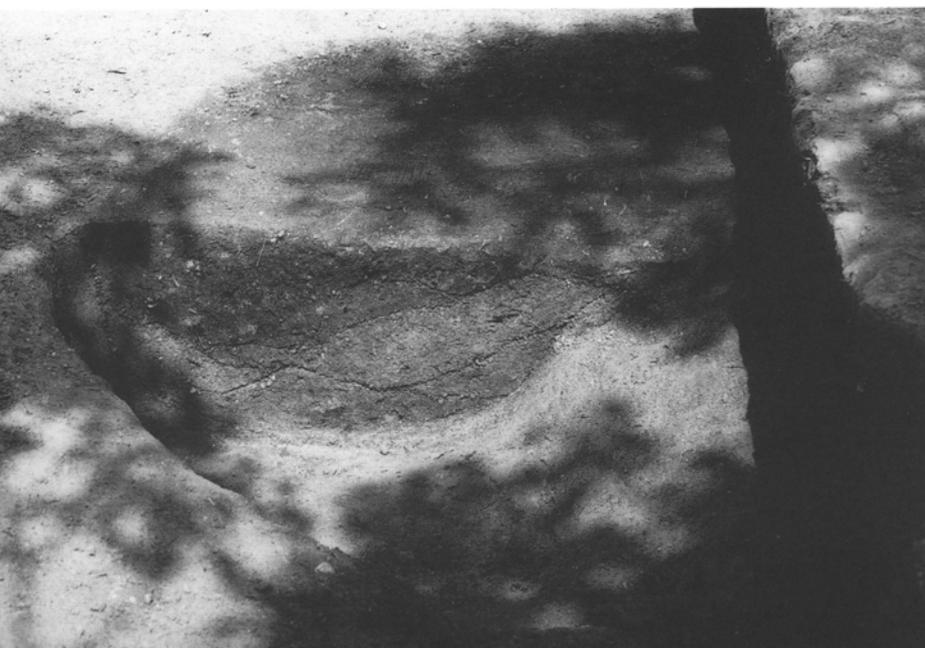




SY01灰原  
灰層堆積状況  
南西から



SK01  
掘削状況  
北から



SK01  
土層堆積状況  
西から



SB01全景  
南東から



SB01全景  
北東から



SB01  
土器出土状況  
南東から



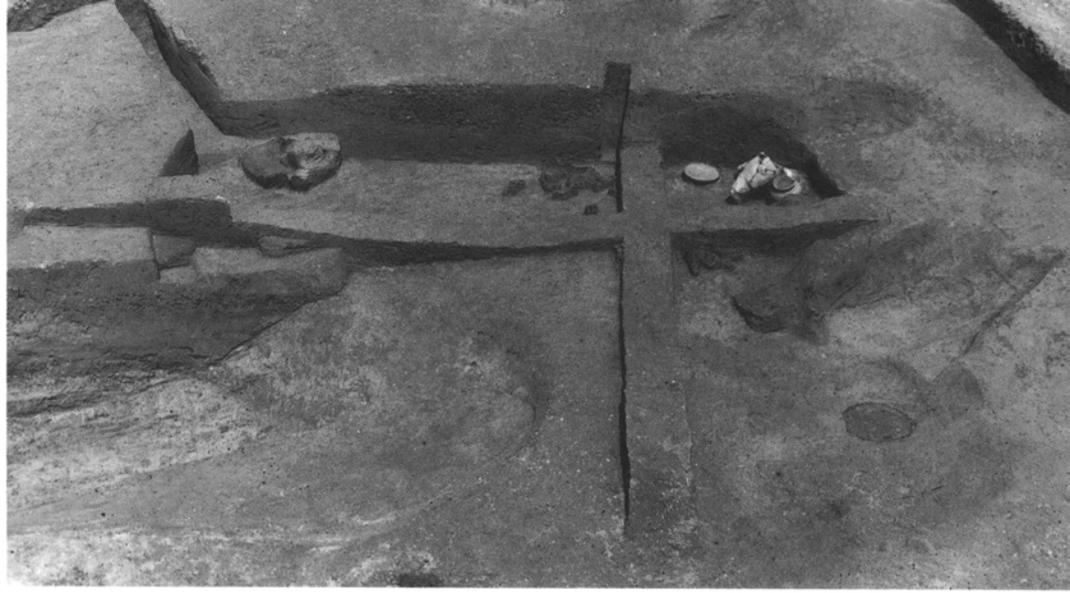
SB01  
カマド断ち割り状況  
南東から



SB01  
カマド断面  
南から



SB01  
カマド完掘状況  
南から



SB02全景  
南東から

SB02全景  
北東から



SB02粘土塊  
南から



SB02土器出土状況 南西から



SB02カマド断面 南東から





1



2



3



17



5



6



18



19



25



37



36



38



34



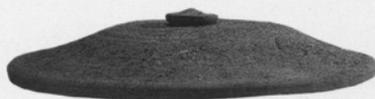
42



40



43



45



46



49



48



50



51

SB02



52



63



56



61



64



65

SK01



71



72

SD02



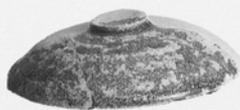
75



79



83



76



81



84



87



90



95



91



88



93



98



102



103



104

SY01灰原・SD01



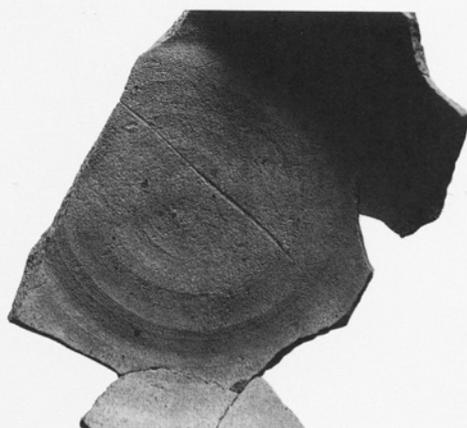
101



13



25



111

調整痕・ヘラ記号

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第36集

# 境川遺跡

1991年3月31日

編集発行 財団法人  
愛知県埋蔵文化財センター

印刷 日本印刷株式会社